

# 比 恵 40

－比恵遺跡群第87次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第857集

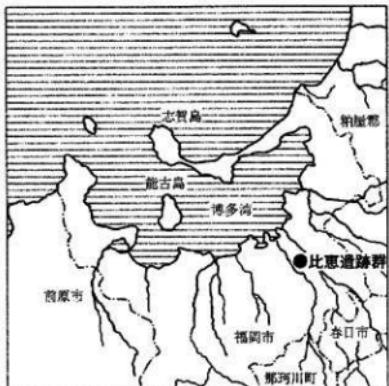
2005

福岡市教育委員会

H I                    E  
比 惠 40

—比恵遺跡群第87次調査報告—

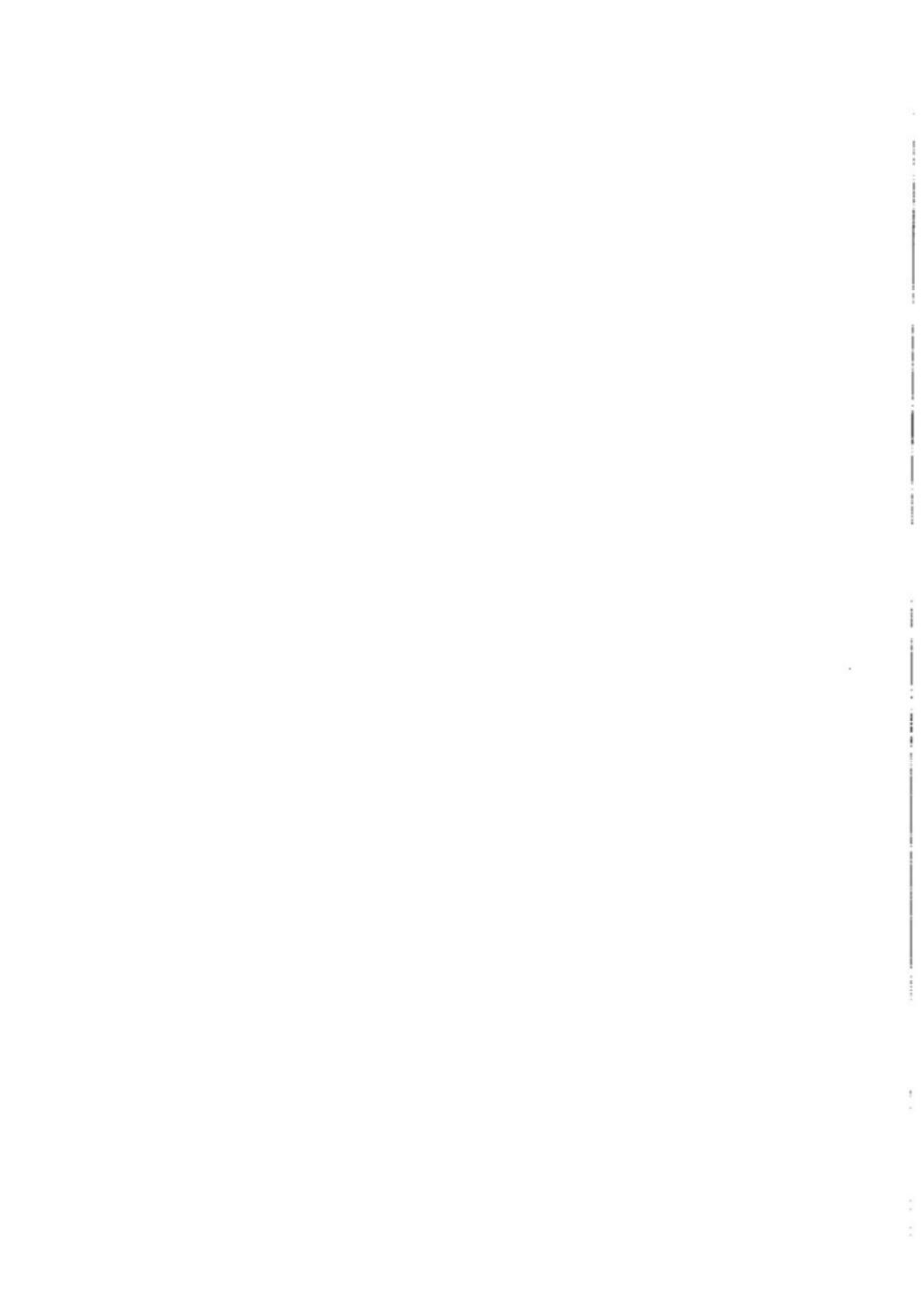
福岡市埋蔵文化財調査報告書第857集



遺跡略号 HIE-87  
調査番号 0353

2005

福岡市教育委員会



卷頭図版 1



ガラス坩堝 (SE07 出土)

卷頭図版 2



SE02 出土土器



SE16 出土土器



SE16 出土土器

卷頭図版 4



SE12 出土木器



SE12 出土木器

## 序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸との人、物、文化の交流が絶え間なく続けられてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれ明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上、注目されているところです。

今回の発掘調査は弥生時代において「奴国」の拠点の一つとして全国で発見された遺跡の中でも特に繁栄を極めたと考えられている比恵遺跡群に位置しています。比恵遺跡群はこれまでにも青銅器、鉄器をはじめとする数々の遺物や道構から大陸の先進技術の受容や人々の交流を窺わせ、注目されている遺跡です。87次調査では井戸から祭祀に伴った多くの遺物が出土し、その中には弥生時代の先進技術をみせるガラス培塿の完形品も出土しました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際して協力いただいた新栄住宅株式会社をはじめ関係者各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木とみ子

## 例　　言

1. 本書は福岡市博多区博多駅南6丁目9-4において福岡市教育委員会が2003年度に実施した発掘調査報告書である。
2. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構図面作成は荒牧、兼田ミヤ子、小野千佳、高手與志子が行い、遺構写真撮影は荒牧が行った。
3. 本書に掲載した遺物実測は濱田美紀、相原聰子、荒牧、斎藤は大石菜美子、荒牧、遺物写真撮影は常松幹雄が行った。
4. 本書のIV「SE07出土のガラス加工具について」を埋蔵文化財センターの比佐陽一郎が執筆し、他は荒牧が執筆、編集した。
5. 本書掲載の実測図、写真、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用されていく予定である。

## 凡　　例

1. 本書掲載の遺構図方位は国十座標北による。
2. 掲載した遺物は通し番号を付し、木器については別個に通し番号を付した。

\*表紙の墨字は安野 良さんによる。

## 本文目次

I はじめに	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査の経過	1
(3) 調査体制	1
II 位置と環境	2
III 調査の記録	5
(1) 井戸	5
SE01	5
SE02	9
SE03	14
SE04	15
SE05	17
SE06	18
SE07	19
SE08	20
SE11	28
SE12	29
SE13	38
SE14	40
SE15	41
SE16	46
(2) 港	
SD09、10	55
IV SE07出土のガラス加工具について	56
V おわりに	60

## 挿図目次

Fig. 1 第87次調査地点位置図 (1/2,000)	1	Fig. 9 SE03出土遺物実測図 (1/3)	14
Fig. 2 比恵遺跡群既応調査位置図 (1/2,000)		Fig.10 SE03実測図 (1/40)	14
	3	Fig.11 SE04実測図 (1/40)	15
Fig. 3 比恵遺跡群87次調査構全体図 (1/200)		Fig.12 SE04出土遺物実測図 (1/3)	16
	折り込み	Fig.13 SE05実測図 (1/40)	17
Fig. 4 SE01実測図 (1/40)	5	Fig.14 SE05出土遺物実測図 (1/3)	17
Fig. 5 SE01出土遺物実測図 (1/3)	6	Fig.15 SE06出土遺物実測図 (1/3)	18
Fig. 6 SE02実測図 (1/40)	9	Fig.16 SE06実測図 (1/40)	18
Fig. 7 SE02出土遺物実測図1 (1/3)	10	Fig.17 SE07出土遺物実測図 (1/3)	19
Fig. 8 SE02出土遺物実測図2 (1/3)	11	Fig.18 SE07実測図 (1/40)	19

Fig.19	SE08実測図 (1/40) .....	20	Fig.35	SE14出土遺物実測図 (1/2、1/3) .....	40
Fig.20	SE08出土遺物実測図 1 (1/3) .....	22	Fig.36	SE15実測図 (1/40) .....	41
Fig.21	SE08出土遺物実測図 2 (1/6) .....	23	Fig.37	SE15出土遺物実測図 1 (1/3) .....	42
Fig.22	SE08出土遺物実測図 3 (1/3) .....	24	Fig.38	SE15出土遺物実測図 2 (1/2、1/3) .....	43
Fig.23	SE08出土遺物実測図 4 (1/3) .....	25	Fig.39	SE16実測図 (1/40) .....	46
Fig.24	SE11実測図 (1/40) .....	28	Fig.40	SE16出土遺物実測図 1 (1/3) .....	48
Fig.25	SE11出土遺物実測図 (1/3) .....	28	Fig.41	SE16出土遺物実測図 2 (1/3) .....	49
Fig.26	SD12実測図 (1/40) .....	29	Fig.42	SE16出土遺物実測図 3 (1/3) .....	50
Fig.27	SE12出土遺物実測図 1 (1/3) .....	30	Fig.43	SE16出土木器実測図 (1/4) .....	51
Fig.28	SE12出土遺物実測図 2 (1/3) .....	31	Fig.44	SD09、10実測図 (1/100) .....	54
Fig.29	SE12出土木器実測図 1 (1/4) .....	32	Fig.45	SD10出土遺物実測図 (1/2、1/3) .....	55
Fig.30	SE12出土木器実測図 2 (1/4) .....	33	Fig.46	SE07出土のガラス加二具 .....	56
Fig.31	SE12出土木器実測図 3 (1/4) .....	34			
Fig.32	SE13実測図 (1/40) .....	38			
Fig.33	SE13出土遺物実測図 (1/3) .....	39			
Fig.34	SE14実測図 (1/40) .....	40			



1 比恵遺跡群 2 那珂遺跡群 3 板付遺跡  
比恵遺跡群と周辺遺跡群 (1/10,000)

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

平成15年5月2日、新栄住宅株式会社より福岡市博多区博多駅南6丁目9-4における分譲マンション建設計画に伴って「埋蔵文化財の有無について（照会）」の書類が埋蔵文化財課に提出された。これを受けて当課では書類審査を行い、試掘調査を実施した。その結果、調査が必要と判断し、調査期間と費用を提示し、協議を重ねた。発掘調査は平成15年11月4日より調査を開始した。調査は約2ヶ月半を要し、平成16年1月20日に終了した。

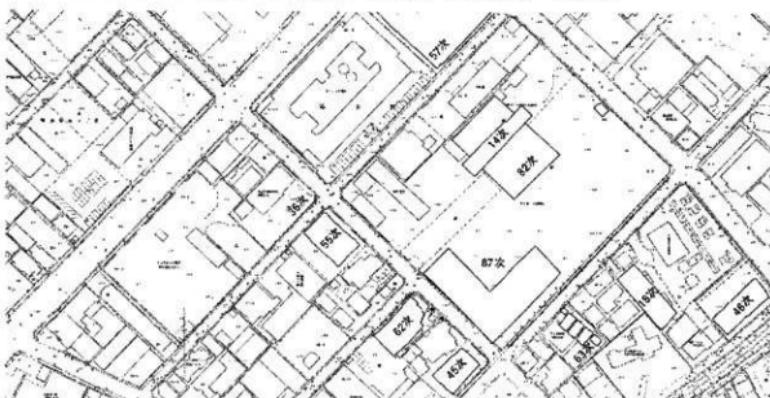
## 2. 調査の経過

調査区は建物建築部分に限られ、敷地全体の面積3,842m<sup>2</sup>に対し、約1/3の1,402m<sup>2</sup>を行った。その範囲は幅17~20m、長さ48mの長方形を組み合わせたL字の形状を呈す。現況は駐車場で平坦面を有し、コンクリートを張っている部分があった。重機により約30cmの整地上を剥ぎとり、次に人力によって遺構検出を行った。検出面は地山の鳥栖ロームで、包含層は無く、かなり削平を受け、建物基礎等の搅乱が多かった。遺構は井戸等の深いものしか遺存せず、多くが消滅していた。調査はこの井戸を中心にして、下底からは多くの遺物が出土した。その中にはSE07から出土したガラス壙塙の完形品のような貴重なものが含まれる。井戸の下底から水が湧き出すものはほとんど無く、都市化とともに水位もかなり下がっているものと思われる。遺構が少なかったために調査は比較的早期に終了した。

## 3. 調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

(調査主体) 福岡市教育委員会 (調査総括) 埋蔵文化財課長(前) 山崎純男 調査第2係長(前) 田中寿夫 (庶務) 文化財整備課 御手洗 清 (試掘調査・協議) 事前審査係長(前) 池崎謙二 担当 久住猛雄 (調査担当) 荒牧宏行 (調査作業員) 内山和子 黒瀬千鶴 武田潤子 松井一美 安高精一 小野千佳 高手興志子 兼田ミヤ子 河野一一 甲斐康完 酒井次憲 豊丸秀仁 田上智雄 大賀一 水田八重子 北原山起子 渋谷留雄 濱フミ子 知花繁代 沖政芳 松若俊美 (資料整理) 松下伊都子 小金丸昌世 金丸幸加 大石菜美子 相原聰子



## II 位置と環境

### (1) 立地

調査地点は比恵遺跡群の中央部南寄りに位置する。現況は駐車場で平坦に均されていた。クラッシャー、客土を除去し GL. より 40~60cm 下げた鳥栖ローム上面が地山の遺構検出面となる。地山の鳥栖ロームは標高 6.56m に削平され、フラットな地形になっていた。

比恵遺跡群は那珂川、御笠川の両河川に挟まれ、北西方向に延びた洪積世台地である。調査地点はこの頂部近くに位置している。

既往の調査からみた遺構検出面である鳥栖ロームの地形は第36次調査地点の標高 7.3m のをトップに本調査地点の西側の第55次、62次、45次調査地点で 7.0~7.15m の比較的高い地形が延びている。

これに対し、東側では北東部の第53次、第21、15次で遺構が比較的残り削平の度合いが比較的小さいと考えられる地点で標高 6.7m ~ 6.2m を測り東側へ傾斜している。また、本調査地点と近接した第88次調査地点では遺構が比較的良好残りながらも標高は 6.33m まで下がっている。従って、比恵の台地は本調査地点と現トビレックス博多を結ぶ付近から西側が頂部に位置し延びていたものと推定され北東方向に傾斜している。

この頂部から西側は程なく急な傾斜がみられ、第11次調査地点では標高 6.2~5.1m まで下がる。このことは尾根状に延びた台地の東側が緩やかな勾配であるのに対し、西側は急に傾斜していく地形を推測させる。

さらに南北にかけては第49次、第50次 D 区では標高 6.9m で遺構の遺存が悪く、かなり削平を受けているものと思われ、頂部がこの方向に延長していることを予想させる。これに対し東側の第50次 C 区では同じく標高 6.9m でも遺構は濃密に分布していることは弥生時代の傾斜にちかい地形が比較的保たれていると考えられる。さらに頂部の北側延長に近い第50次 C 区より約 50m 離れた第19次調査地点では標高 6.4m まで下がりながら遺構は比較的良好遺存することから頂部も北西方向へ傾斜していることが窺える。

南側においては頂部近くに位置しているとみられる第63次調査地点の標高 7.0m では遺構は削平を受け少なくなっているが、東へ離れた第18次では標高 6.65~6.05m まで南へ下降していくにも拘わらず遺構は比較的残り、さらに南側の第46次では標高 5.65~5.45m の八女粘土まで達しながらも遺構が検出されることから南東に位置した那珂の台地との間に谷部が抉り込む地形がみられる。

上記の地形に対し、本調査地点は台池頂部南よりに位置し、本米標高は 7.0m 以上、恐らく 7.5m 前後の高所であったことが推測されるが、現在では約 1m の削平を受け、井戸のみ遺存する。近接した82次でも深い削平を受け遺構の消滅が著しいが、削平を受けた鳥栖ロームの標高が北西の 6.7m から東の 6.36m まで傾斜していることは元の地形の傾斜に起因し削られたものと思われる。

### (2) 弥生時代の遺構について

上記の地形に対し既往の調査で検出された弥生時代の遺構がどのように配置されているものか若干ふれておく。既に指摘されているが、第62、55、50次 D 区で検出された弥生終末~古墳初頭に時期比定される平行した 2 条の溝が尾根状にのびた台地頂部に沿って延び、その溝間に道路として認識されている。(1) で述べたようにこの道路状遺構がのる台地頂部から東側は緩やかな傾斜で弥生時代の遺構が濃密に分布し集落の中心であることを推測させることから、この道路状遺構は台地頂部に占めるが、集落全体からみると西側縁辺よりに配置されているようと思われる。さらにこの集落の東側には、第21次、15次、53次調査で緩やかに傾斜していく台地を分断するように弥生中期末に埋没した大溝が検出されている。これも指摘されているように断面 V 字形の凧濠とみられる。

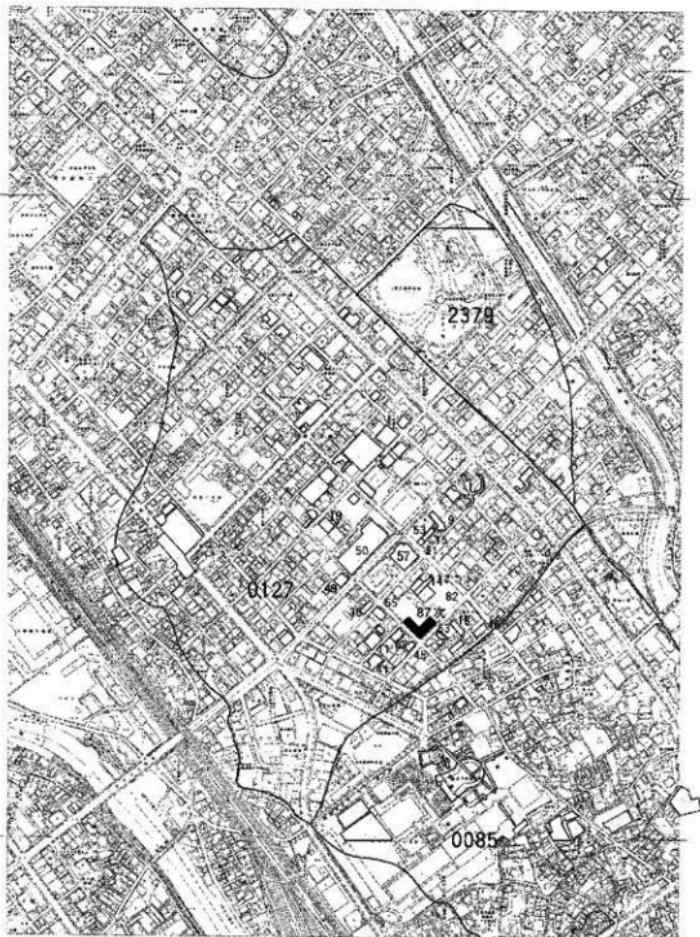


Fig. 2 比惠造跡群既応調査位置図 (1/2,000)  
0127 比惠造跡群 0085 邢河造跡群 2379 丽江造跡群



Ph. 1 調査区西半全景（北西から）



Ph. 2 調査区東半全景（北から）

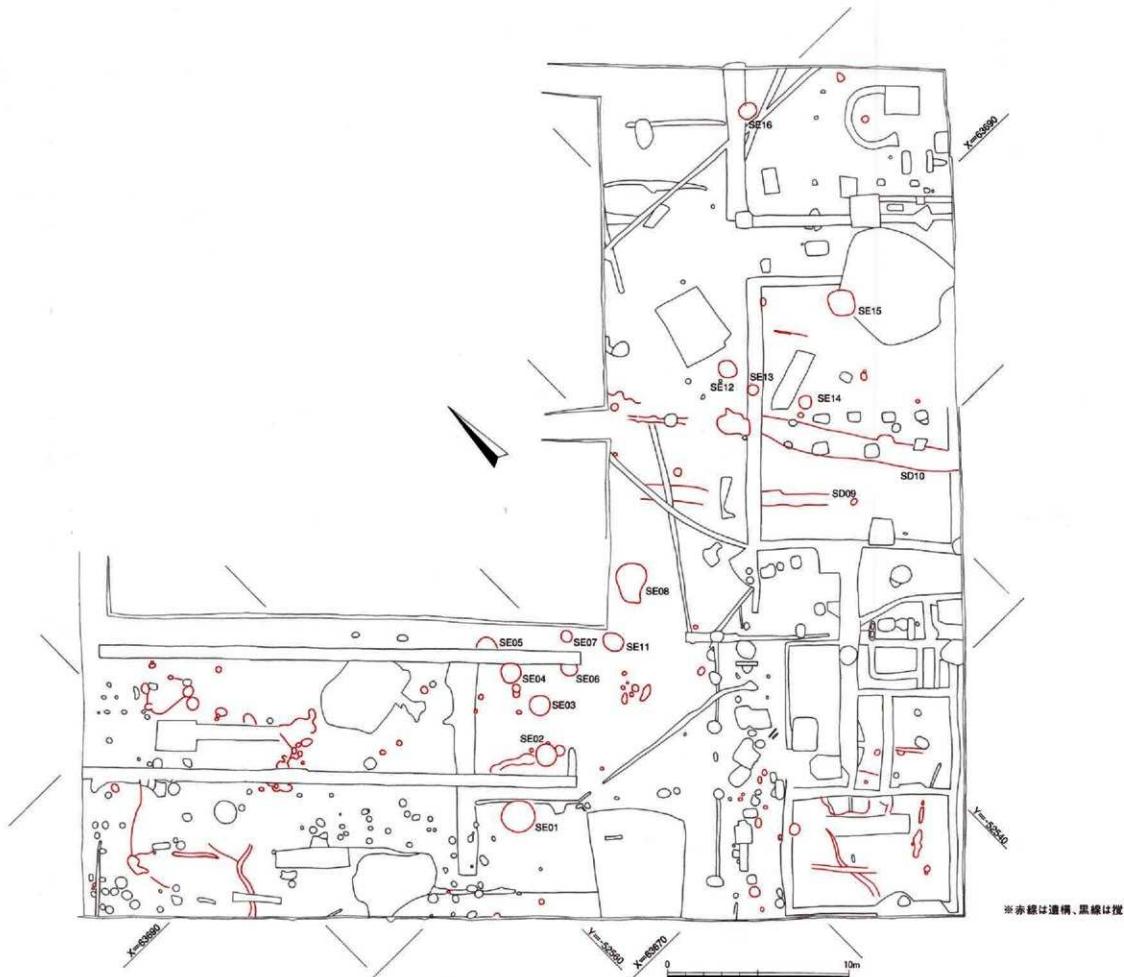


Fig.3 比恵遺跡群87次調査造構全体図 (1/200)

### III 調査の記録

#### (1) 井戸

総数14基検出された。調査区の中央部と東寄りの2箇所に集中する。

##### SE01

調査区西側で検出された。径1.8mの円形プランを呈す。検出面からの深さ2.4mを測り、下底近くがオーバーハングし崩落している。遺物は鳥栖ロームの下部から八女粘土との境付近で破片が集中し、炭が分布していた。最下層からは9の須恵器壺と13の土師器壺片が出土した。

##### 出土遺物

下底から出土した9、13以外は上部からの出土である。4の土師器壺は遺物が集中するレベルより上位から完形で出土した。1~8は土師器壺である。1~3は口径11.5~12.0cmを測り、底部は平坦若しくはわずかに丸みをおび、2、3には板状压痕を有す。灰白色に近い色調で硬質である。4は完形で口径12.5cmを測り、底部はやや上げ底ぎみである。体部中位で屈曲し、口縁端部がわずかに外反する。赤褐色を呈し、砂粒を多く含み脆弱な焼成である。5、6の体部は直線的に延び、口縁部がわずかに外反する。7の壺部内面には略円形の細い線刻を有す。8は底部から直に近い角度で立ち上がり外湾していく。9の須恵器壺は前代の混入か。10~13は土師器壺である。10の内外面はススが付着し、外面は器面があれて調整不明。内面には細かい横位のハケメがみられる。11は頸部の壺は不明瞭で体部の下位がふくれている。内面は口縁部が粗いヨコハケ、体部はヘラケズリを施す。12の頸部の壺には棒状のもので突いた痕跡が残る。内面はナデ溝整。13の内面は口縁部から体部上位にかけて粗いヨコハケ後ナデ、下位は弱いヘラケスリが施されている。

以上の遺物から5、6の壺には古い様相がみられるが、9世紀後半以降と考えられる。

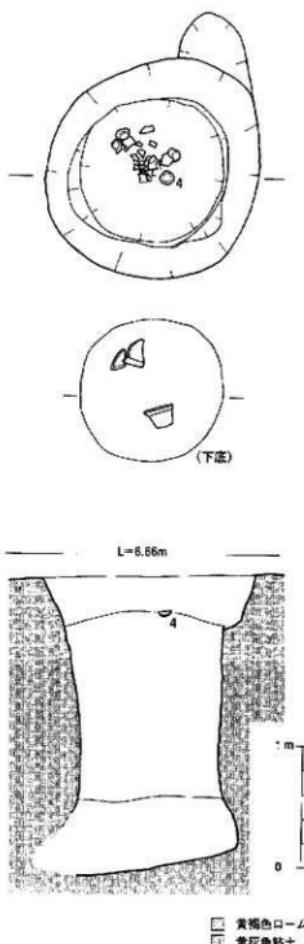


Fig. 4 SE01実測図 (1/40)

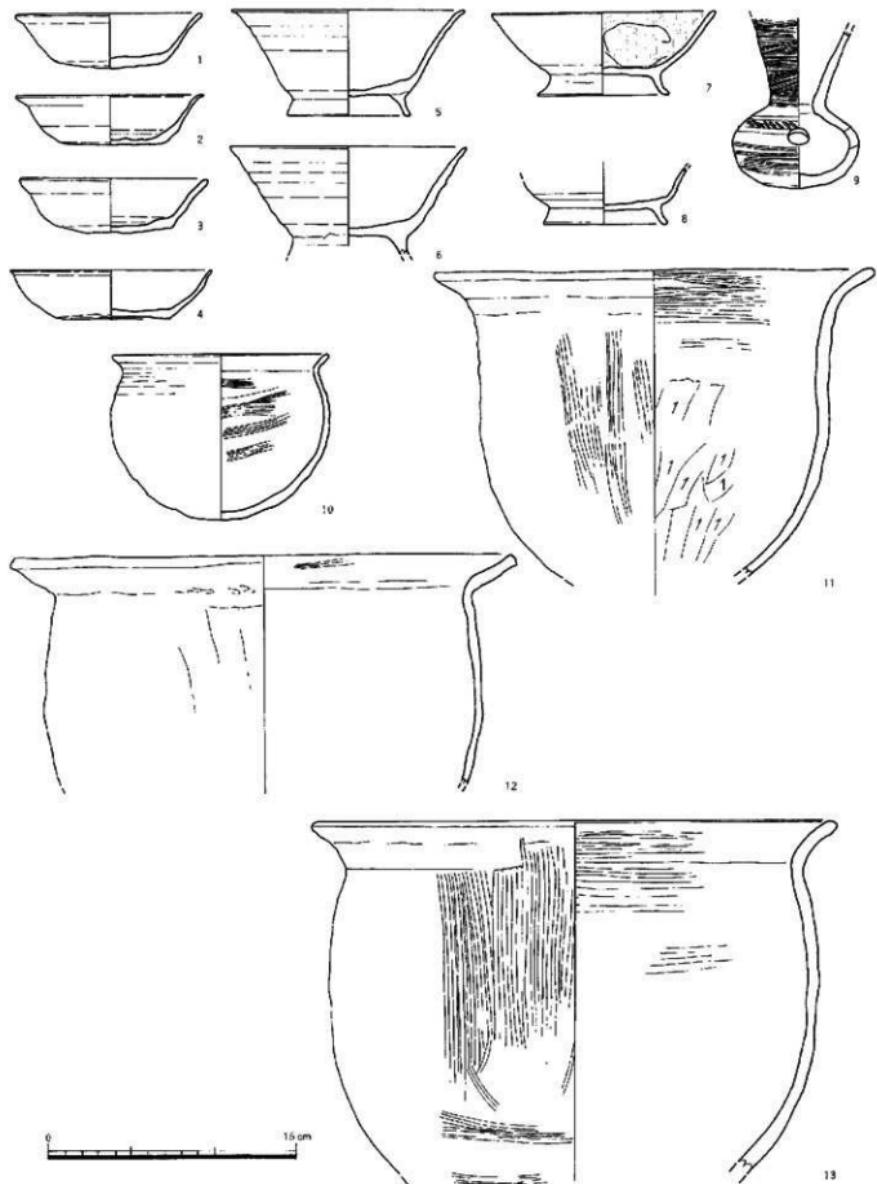
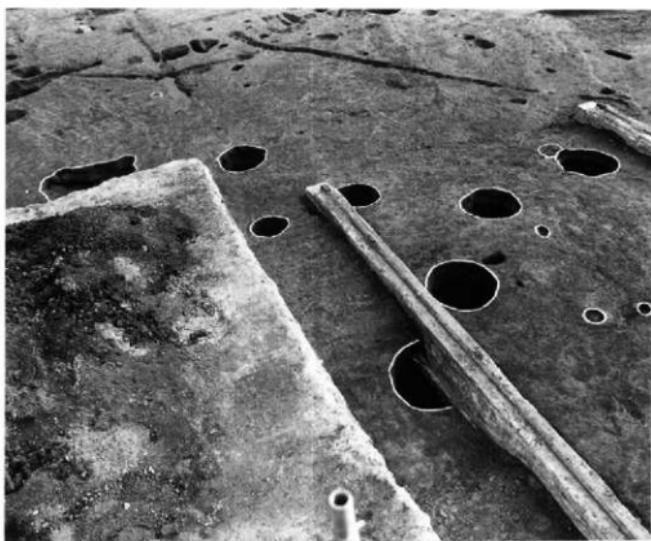


Fig. 5 SE01出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 3 調査区中央部井戸群（北から）



Ph. 4 SE01中層遺物出土状況



Ph. 5 SE01下底遺物出土狀況



Ph. 6 SE01出土遺物

## SE02

調査区中央のSE01に近接して検出された。径1.1~1.2mの円形プランを呈す。検出面から1.2m下がったグライ化した黄灰色の八女粘土上に達した位置まで多くの遺物が出土し、上鍋は入れ子状態で12個体が出土した。さらに中央に径50cmの円形の掘り込みが検出され、下部に曲物の底板やタガ等の木器、23の土鍋、下部の中央に墨書き器15が埋置されていた。

### 出土遺物

14は上部から出土。口径12.6cmを測り、ヘラ切りした底部に板状圧痕が残る。15は最下底から出土した土器器坏である。口縁部をわずかに欠くがほぼ完形。底部中央に「木」の異体字の墨書きがある。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。体部下位にヨコナデによる起伏がみられ、均整な作りである。16は体部が完存する須恵器長頭壺である。17~27は土筒質の鍋である。取手がないもの(17~19)と取手がつくもの(20~27)がある。取手がつくものは器高が高い20、21とそれ以外の扁平なものに若干の違いがある。外面は粗いハケを体部には継位に、湾曲していく底部には縦横から施す。内面は口縁部にヨコハケ、体部は下位に搔き上げるようなハケ若しくはヘラケズリ、上位は横位に近いヘラケズリを施す。底部は指頭痕が残る粗いナデ仕上げを行う。18と24は火熱を受け赤変し、脆くなっている。その他、径24cm以上の曲物が出土した。これらは8世紀後半~9世紀にかけての遺物か。

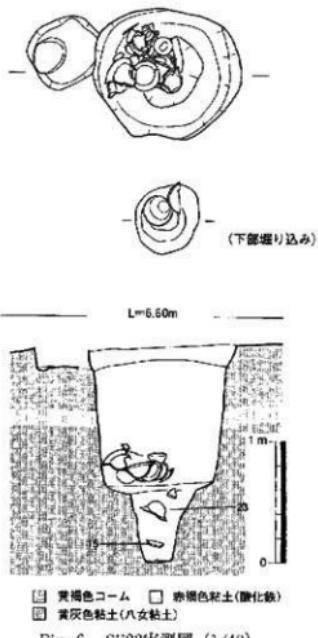


Fig. 6 SE02実測図 (1/40)

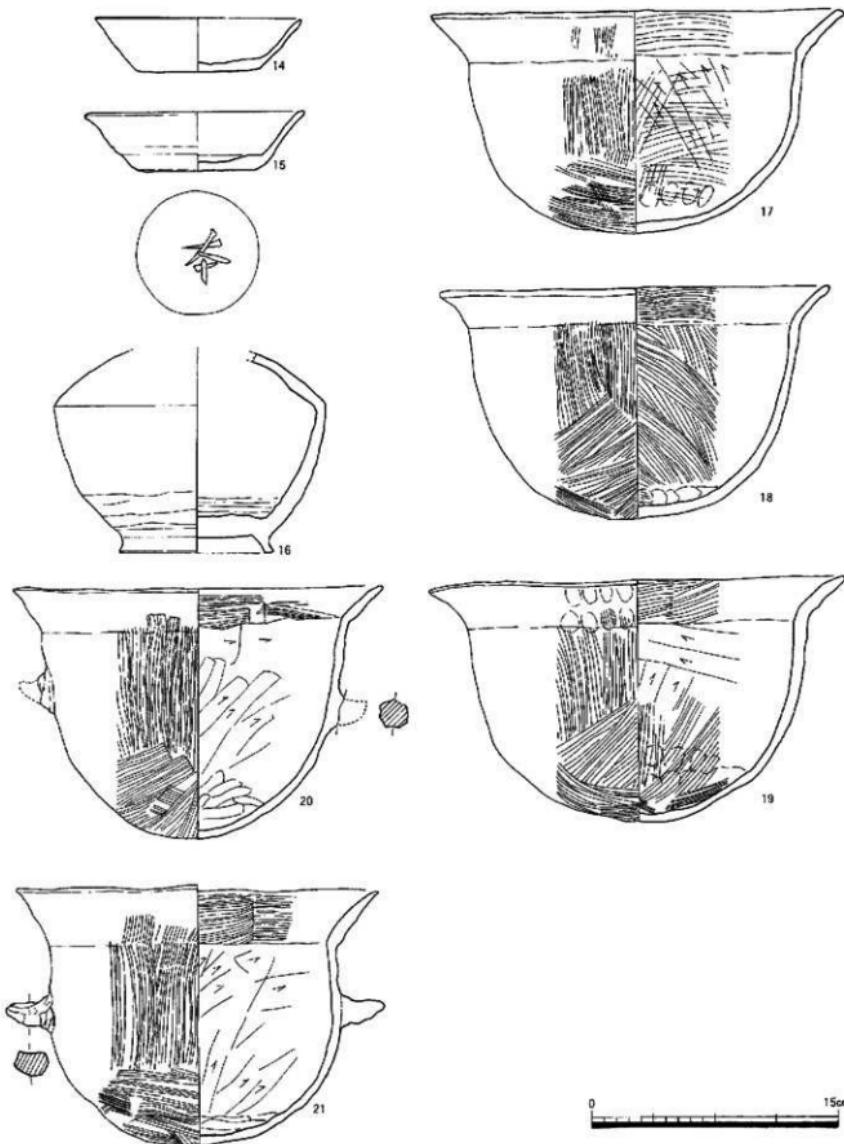


Fig. 7 SE02出土遺物実測図1 (1/3)

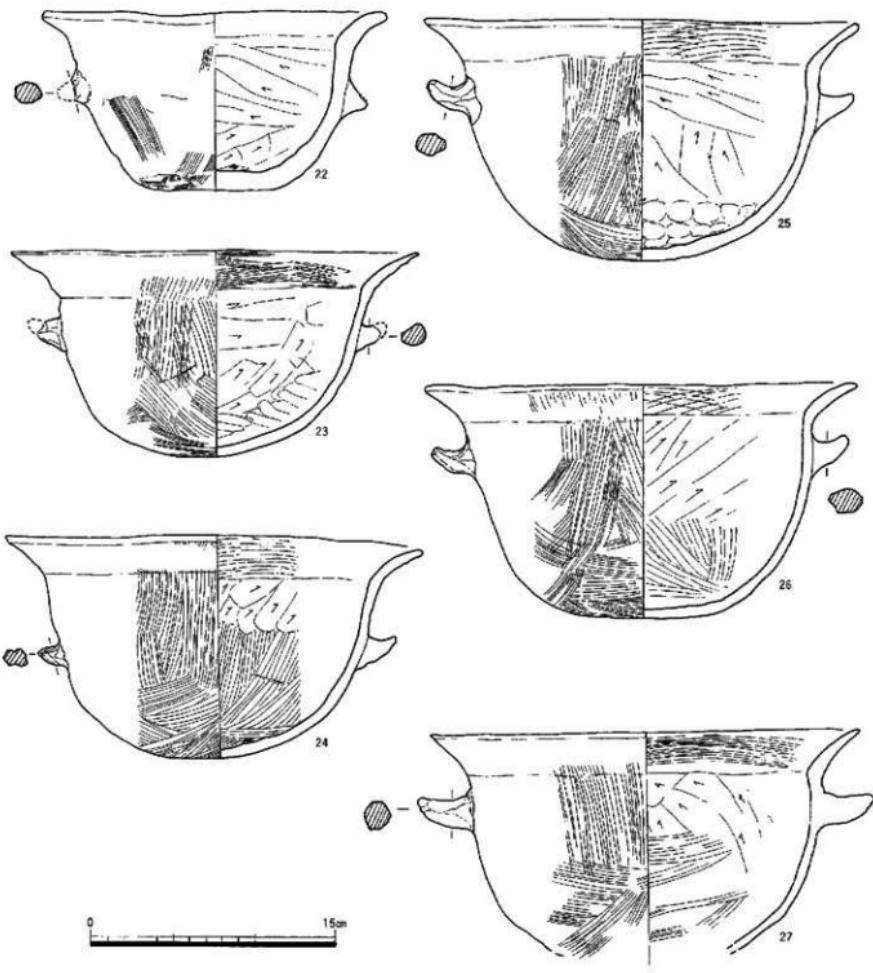


Fig. 8 SE02出土遺物実測図2 (1/3)



Ph. 7 SE02中位遺物出土状況



Ph. 8 SE02下部掘り込み遺物出土状況



16



15



20



21



22



23



24



17

Ph. 9 SE02出土遺物

### SE03

調査区中央で検出された。径105cmの円形プランを呈し、検出面からの深さは2.2mを測る。下底は標高4.7mで灰白色にグライ化した八女粘土に達する。底径65cmで埋置された遺物は無く、全体の遺物出土量も少ない。比較的大きな破片は図示した28の器台片と29の甕口縁部である。いずれも弥生中期中葉を示し、当該井戸の機能した時期に近いであろう。

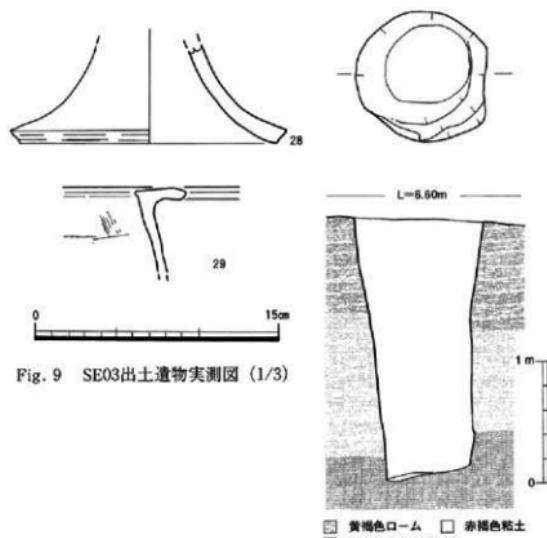


Fig. 9 SE03出土遺物実測図 (1/3)

Fig. 10 SE03実測図 (1/40)

Ph.10 SE03完掘状況

#### SE04

調査区中央で検出された。径115cmの円形プランを呈し、検出面からの深さは155cmを測る。下底は径40cmにすばまり、標高4.8mの鳥栖ロームから八女粘土への漸移層くらいの黄灰色粘土に達する。また、下底には31の口縁部を欠いた壺が埋置されていた。

##### 出土遺物

30の口縁部はわずかに湾曲して内傾している。口縁部の屈曲した接合部は少し丸みをおびて突出する。外面頸部はタテハケ、内面は器面剥落しているが、ナデ調整と思われる。屈曲した境に小口を当てた痕跡が残る。灰白色を呈し、砂粒を多く含む。31は下底から出土した壺である。口縁部を打ち欠いているが、以下は完存している。底部は小さい平底である。外面頸部以下タテハケ、内面頸部はヨコハケ、体部はヨコハケ後ナデ消されている。色は淡黄褐色を呈す。32は下部から出土した器台である。端部はつまみ上げられ刻みが不均等に施されている。内外面に細かいハケメがみられるが、ほとんどナデ消されている。黒褐色を呈すが、焼成は良好である。弥生後期前半位か。

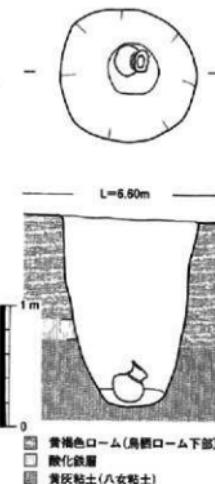


Fig. 11 SE04 実測図 (1/40)



Ph. 11 SE04 下底遺物出土状況

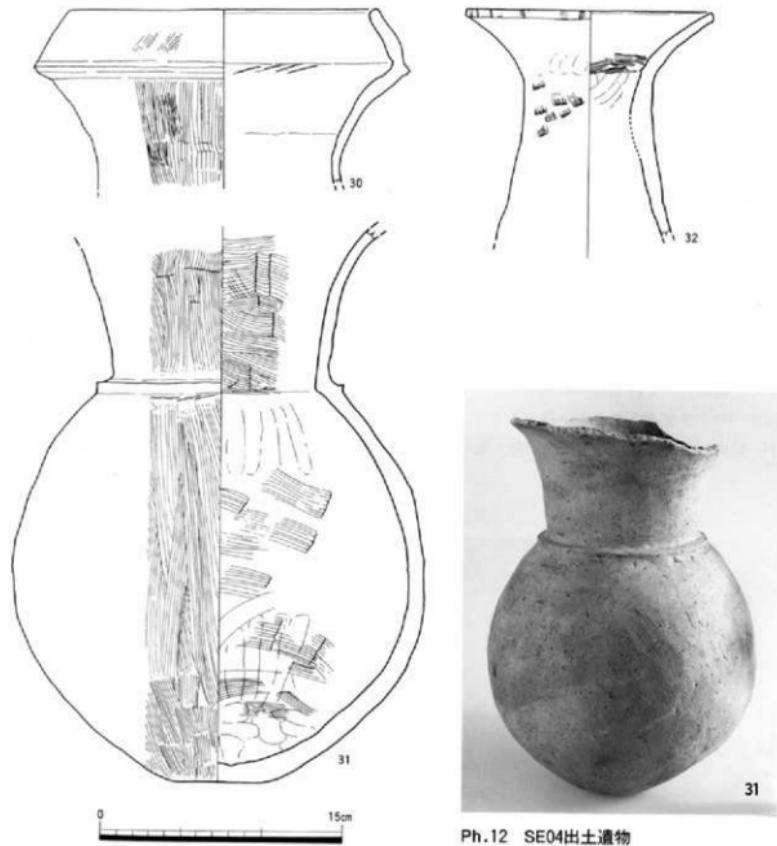


Fig.12 SE04出土遺物実測図 (1/3)

Ph.12 SE04出土遺物

### SE05

調査区中央部で検出され、上部はコンクリートの基礎によって破壊されていた。径110cmの円形プランを呈す。検出面からの深さは210cmで標高4.3mの八女粘土に達する。下底は径80cmを測り、33の壺が埋置されていた。出土木器のW1は径1.4cmの軸が削り出されている。用途不明。33は下底から出土し完形に復元できるが、取り上げの遺漏によるものか体部を部分的に大きく欠く。袋状口縁部の屈曲部は丸みを帯び、端部は部分的に面をなすが、丸みをおびている。底部は平底。弥生中期後半くらいか。この他図示していないが、下部から建築部材も数点出土している。

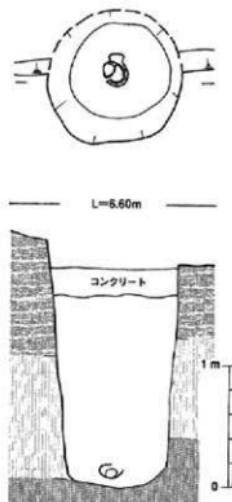
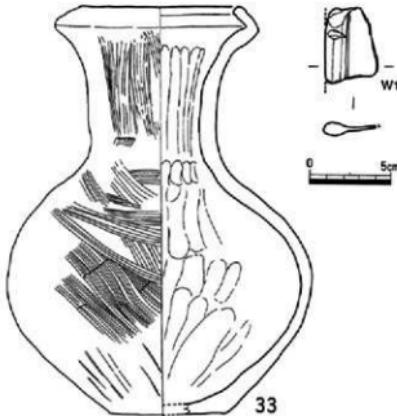


Fig.13 SE05実測図 (1/40)

Ph.13 SE05完掘状況



Ph.14 SE05出土遺物

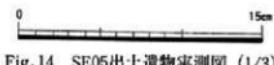


Fig.14 SE05出土遺物実測図 (1/3)

### SE06

調査区中央部で検出された。径80cmの円形プランを呈し、検出面からの深さは180cmを測る。下底は径50cm程度で、標高4.6mの鳥栖ローム下部までしか達していない。出土遺物は少ない。

#### 出土遺物

34の高環脚部には径2.5mmの穿孔を有す。赤褐色を呈す。35は器台か。36の取手は扁平で厚み1.5cm。

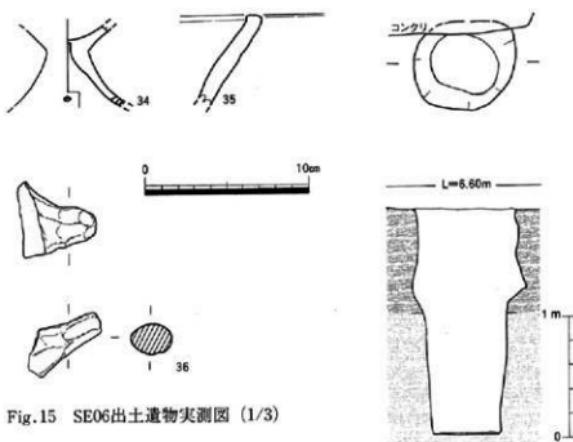
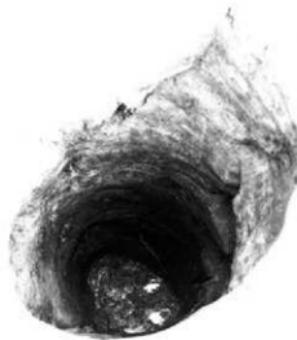


Fig. 15 SE06出土遺物実測図 (1/3)

■ 黄褐色粘土(鳥栖ローム下部)  
□ 赤褐色粘土

Fig. 16 SE06実測図 (1/40)



Ph. 15 SE06完掘状況

### SE07

調査区中央部で検出された。小型の井戸で同様の規模のSE06と近接している。径65cmの円形プランで検出面からの深さは約90cmと浅く鳥栖ローム層内である。出土遺物は少ないが、下部からガラス壇堀の完形品が出土した。この遺物については詳細をIVで論じている。

#### 出土遺物

別項(p56~60)にしたガラス壇堀以外の遺物について記す。37の高環脚部の内面中心部は極めて小さく中実に近い。38は弥生中期の甕口縁部である。



Fig. 17 SE07出土遺物実測図 (1/3)

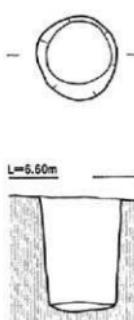


Fig. 18 SE07実測図 (1/40)



Ph. 16 SE07完掘状況

調査区中央部で検出された。長軸長195cm、東側に幅150cmに広がる楕円形プランを呈す。断面形は2段掘り状となり、広がった東側が深く掘りこまれている。遺物は上部で須恵器大甕の破片を主に段落ち上部から多量に出土し、段落ち以下は土師器甕の完形品を含む遺物がなだれ込むように出土した。下底は検出面から深さ180cmを測り、小豆色にグライ化した八女粘土に達している。下底近くからは40の須恵器坏身、43の疑似須恵器甕、52の土師器甕の完形品が出士した。

#### 出土遺物

39、40は須恵器坏身。39は上部から出土した完形品である。受部は小さく浅い。受部径11.5cm、底部は未調整で粗雑な作りである。40は下底から出土し、2/3が遺存する。41は酸化焰焼成による疑似須恵器である。淡赤褐色を呈す。42は中位の段落ちから出土した須恵器甕である。43は下底近くから出土した疑似須恵器甕の完形品である。器面があれていますが、外面カキメ、内面に同心円文の当具痕を残す。黄褐色を呈し胎土に砂粒を多く含む。44は下底近くから出土した須恵器横瓶の破片である。45~47の須恵器大甕は上部から出土し、完形に近く復元できる。45、46はほぼ同形で同じヘラ記号を有す。48は中位の段落ちから出土した須恵器大甕である。頸部に列点文が刻まれ、下位に振状のヘラ記号を有す。49~52は土師器の小型の甕である。いずれもほぼ完形品で、段落ちした中から出土し52は下底近くから出土した。49、50が火熱受け赤変し、脆弱になっているのに対し、51、52は火熱を受け良好な遺存状態である。51は底部に、52は体部の対置した2箇所に黒斑がみられる。53は外面に横位の木目直交タキを施した疑似須恵器である。段落ちの中位から出土した。54も外面体部に横位の平行タタキ、内面にハケメを施した疑似須恵器である。黄褐色を呈し軟質な焼成である。上部から出土。55は長胴形の土師器甕底部である。56、57は段落ちした中位から出土した長胴形の土師器甕である。胴部は張り出し中位で最大径となり、底部は平底に近い。火熱を受け、体部下位は特にススが多く付着する。

この他、図示していないが、荆材、木柄等の木器も数点出土している。また、下部からは牛馬の歯とみられるものも出土した。遺物時期は6世紀末くらいか。

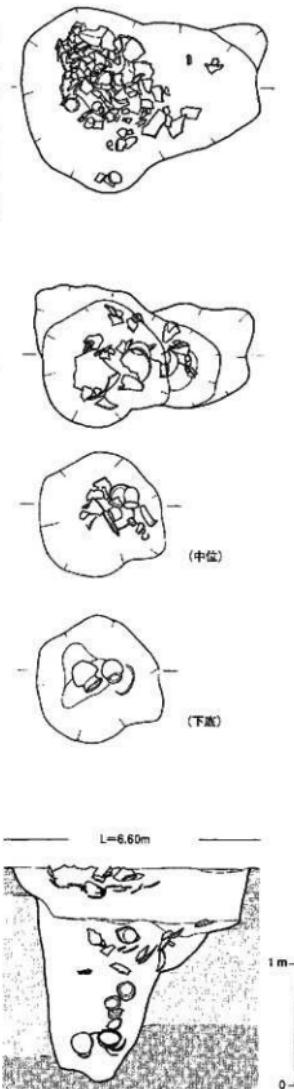
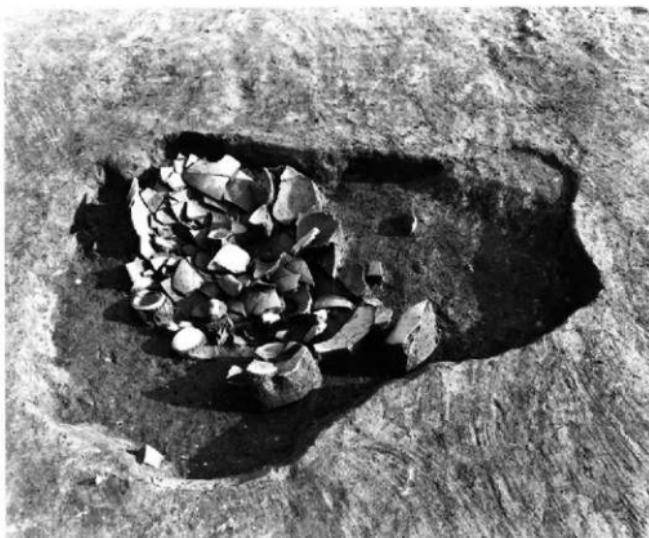


Fig. 19 SE08実測図 (1/40)



Ph.17 SE08上部遺物出土狀況



Ph.18 SE08中層遺物出土狀況

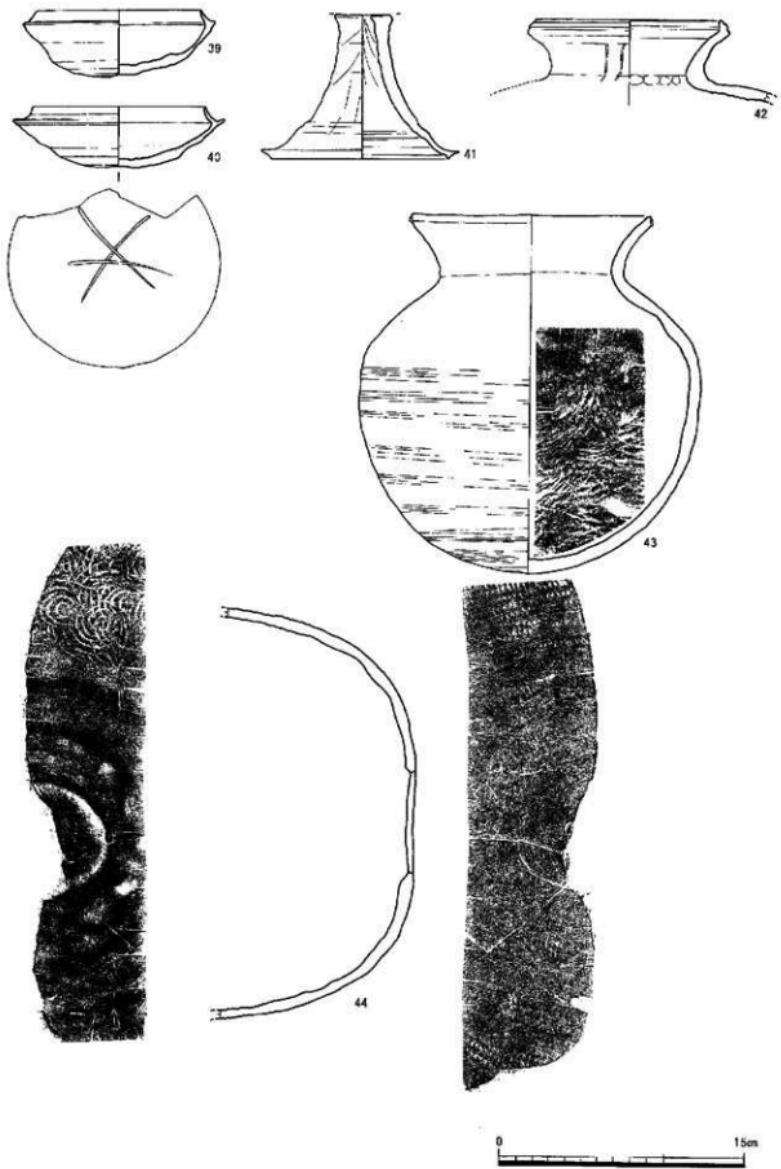


Fig.20 SE08出土遺物実測図1 (1/3)

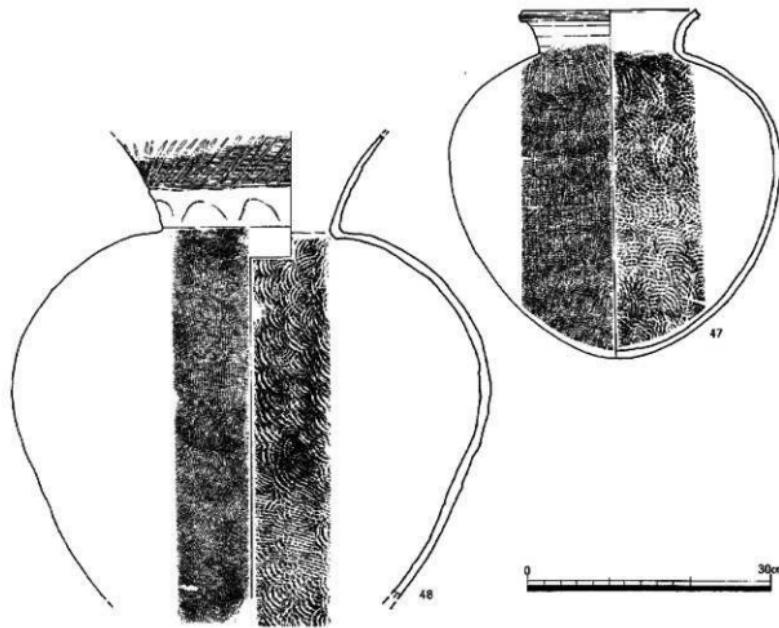
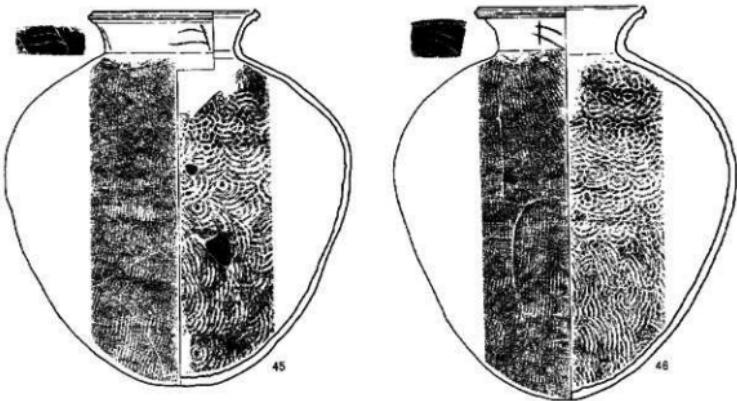


Fig. 21 SE08出土遺物実測図2 (1/6)

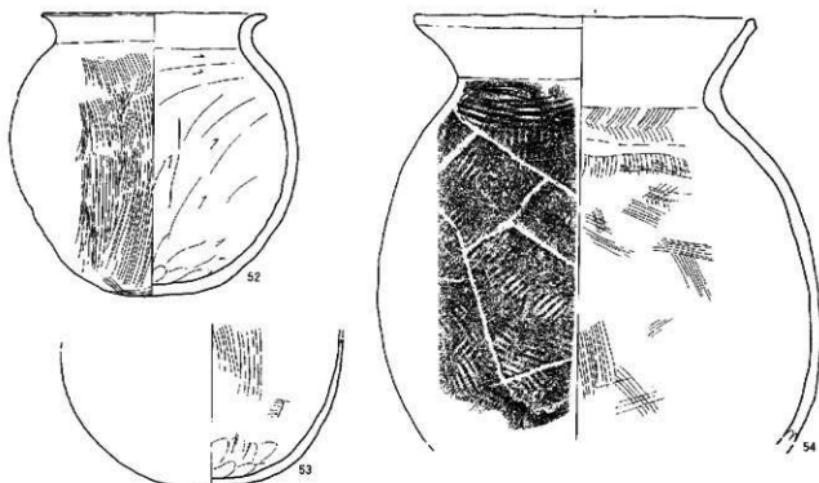
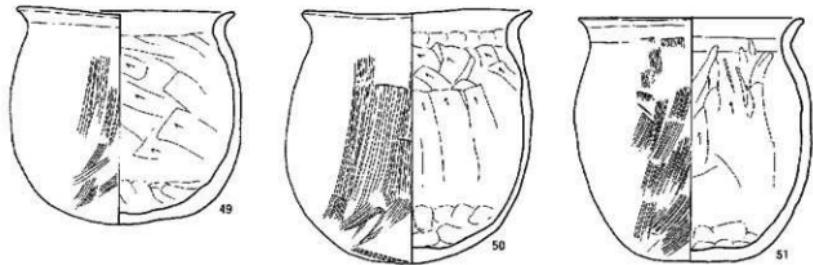


Fig.22 SE08出土遺物実測図3 (1/3)

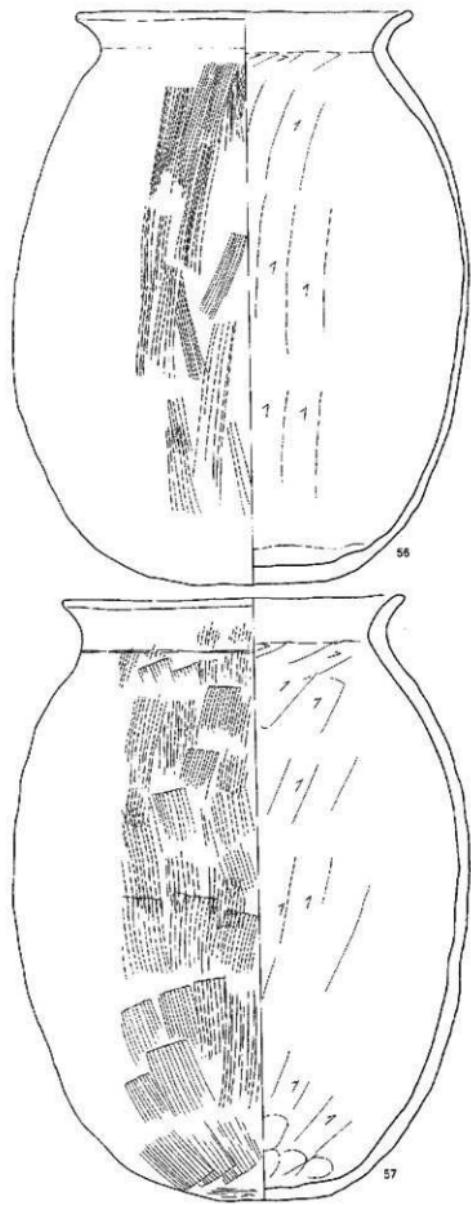


Fig.23 SE08出土遺物夾測圖4 (1/3)



49



43



40



46



47



45

Ph.19 SE08出土遺物 1



50



51



52



54



57



56

Ph.20 SE08出土遺物 2

### SE11

調査区中央部で検出された。鳥栖ロームのレベルまでは楕円形に近いプランであるが、八女粘土上部の酸化鉄が沈着したレベルで径 1 m の正円形に近いプランとなる。下底は検出面からの深さ 2.6 m を測り八女粘土に達している。底径は約 80cm を測る。

#### 出土遺物

58は上部から出土した壺体部である。外面体部上位にタテハケ、下位に横位から斜位のハケメを施し、内面にも底部まで横位から斜位のハケメを施す。底部は小さくわずかに凸状である。弥生後期中葉位か。

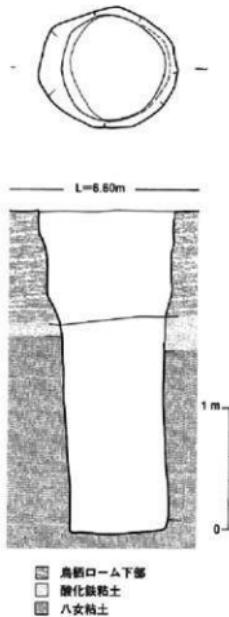


Fig. 24 SE11実測図 (1/40)



Ph. 21 SE11実掘状況

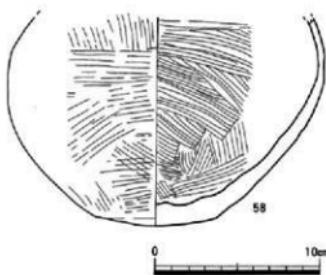


Fig. 25 SE11出土遺物実測図 (1/3)

## SE12

調査区東側で検出され、SE13、14と近接する。上面で径約1mの円形プランを呈し、検出面からの深さは約2.4mを測る。底面は黄灰色の八女粘土に達し、下底近くがオーバーハングし、径80~100cmの楕円形を呈す。下底から60cm上のレベルでW2~5の木器が出土した。以下、破片遺物が出土し、下底にはほぼ完形の壺62、63が埋置されていた。

### 出土遺物

59の蓋は下層から出土し、2/3が遺存する。外面丹塗り磨研、内面ナデ調査を施し、中央に小口を円弧状に連続して当たる痕跡が残る。60は最下底から出土したほぼ完形の鉢である。外面口縁部付近を丹塗り磨研し体部下位には縦位のタテハケが施されている。内面も口縁部を主に丹塗り研磨されている。61は下層から出土した内厚の器台で指頭痕が多く残す。62は最下底から出土し、口縁部を欠くほかは完存する丹塗り磨研土器である。63も最下底から出土した口縁部を欠いた壺である。外面頸部から胴部上位までハケメを良く残し、下位は縦位のタテハケが部分的に残るが、ナデ若しくはミガキを施す。64は下層から出土した楕円形上器である。外面体部上位まで丹塗り、内面頸部まで丹塗り、体部は黒塗りされている。65は下底近くから出土した壺である。66も下底近くから出土した壺（壺棺か）である。井筒もしくは、壁体補強に用いられたものか。以上の出土遺物の時期は弥生時代中期末までに含まれると考える。

### 木器

W2~W5は下底から約60cm浮いた位置で集中して出土した。樹種はいずれも未鑑定である。W2は幅4.6cm、長さ6.6cmの短い柄が付いた短径32.4cm、長径37cmの楕円形の円盤が削り出されている。

部炭化した部分がみられる。柵目取りで、厚み1.8cmの横断面は反っている。W3は丸太材を剥り抜いた容器である。長さ32.4cm、最大幅（径）21cmを測る。剥り抜いた部分の外法は幅13cm、長さ19cmで台形状に底面にむかって窄まる。W4の二つ又歯は孔の削り込まれた角度から柄との装着角度は30°位の狭角とみられる。W5は4個の脚部が付いた盤状の容器である。脚部は遺存が良好な箇所で高さ7cmを測る。図上、右上の突起状の部分は形状を残している可能性がある。

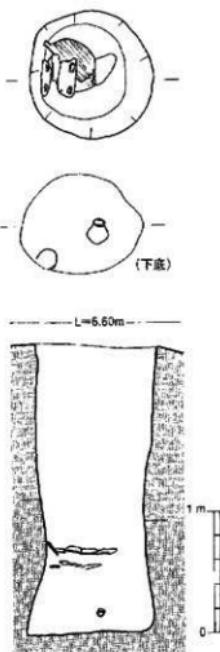


Fig. 26 SE12実測図 (1/40)

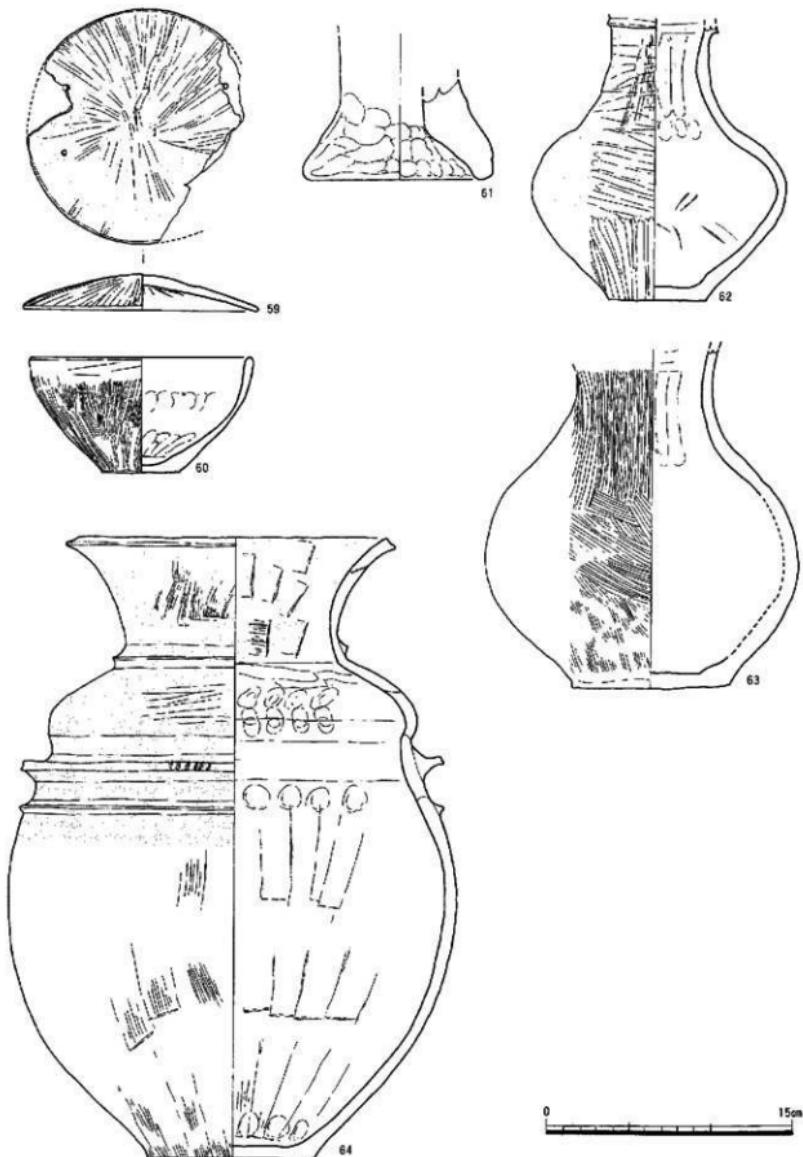


Fig.27 SE12出土遺物実測図 1 (1/3)

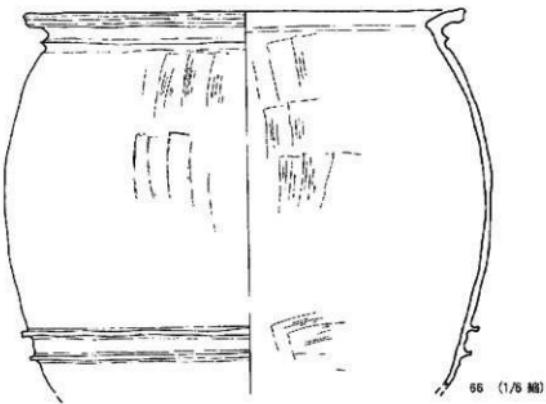
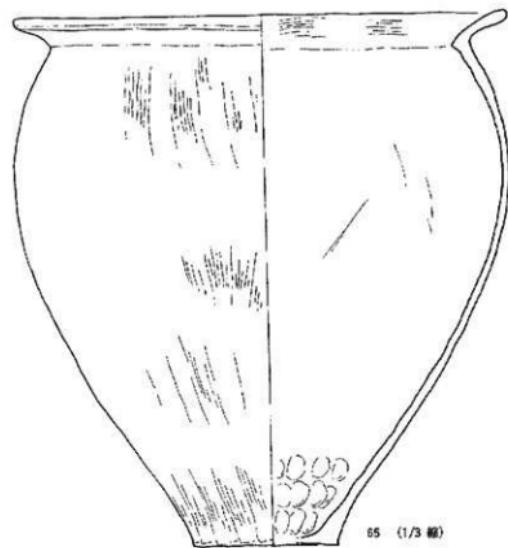


Fig.28 SE12出土遺物実測図2 (1/3、1/6)

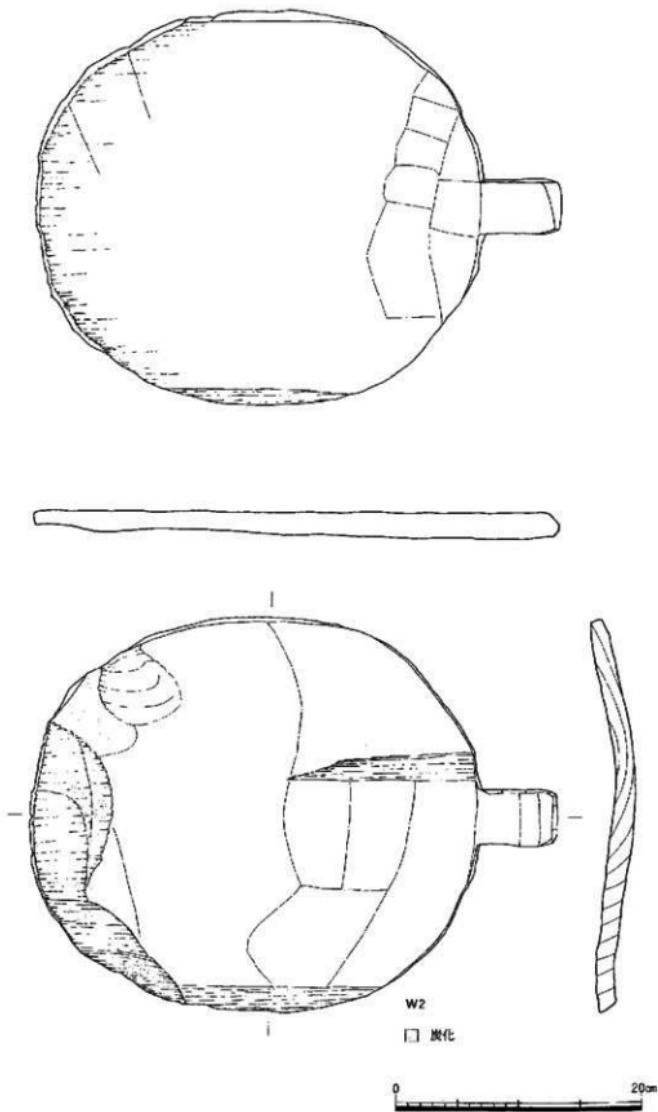
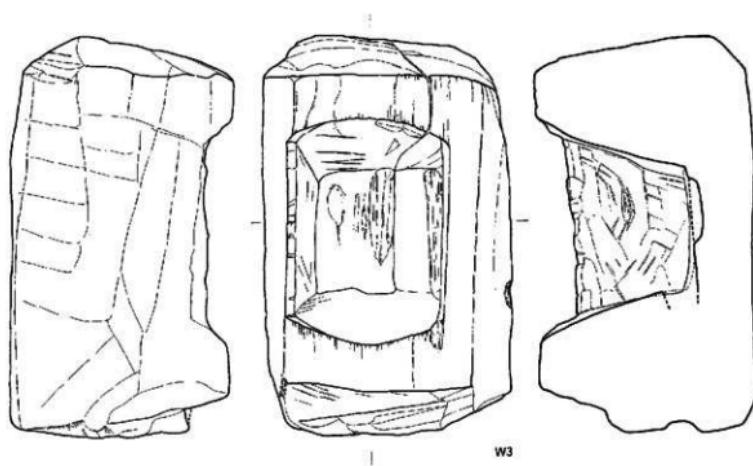


Fig. 29 SE12出土木器実測図 1 (1/4)



W3

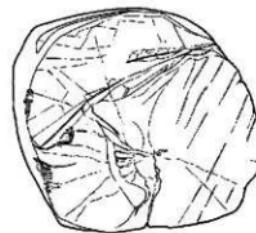
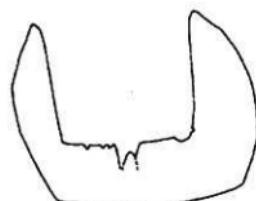


Fig. 30 SE12出土木器実測図 2 (1/4)

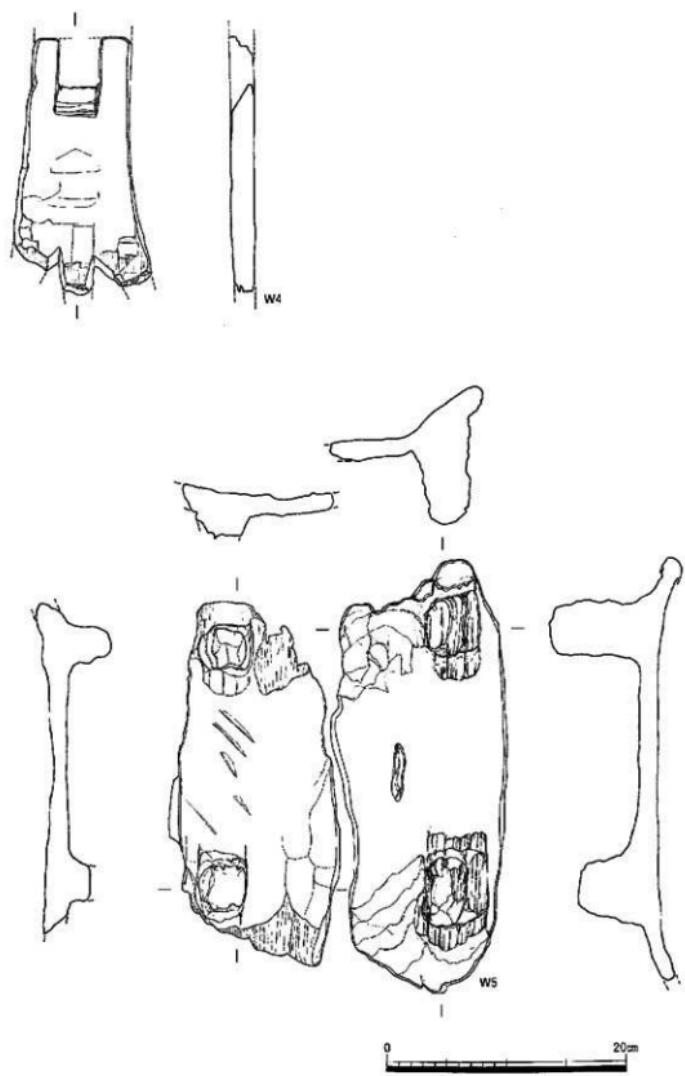
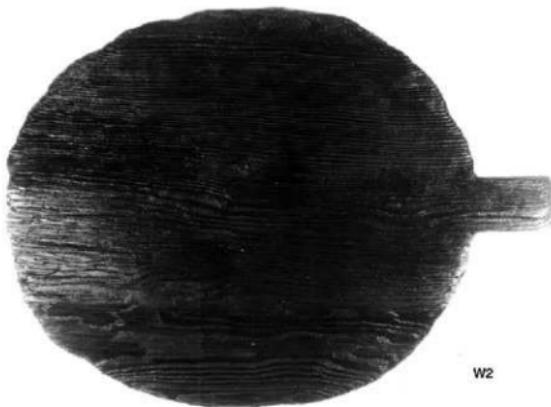


Fig.31 SE12出土木器実測図 3 (1/4)



W2



W3

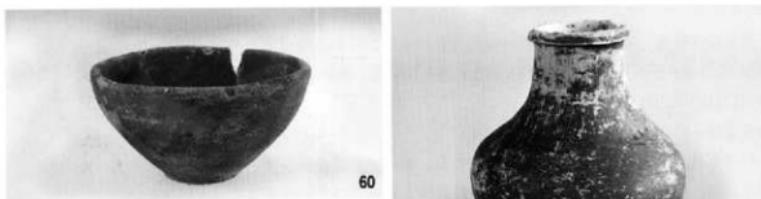
Ph.22 SE12出土木器



Ph.23 SE12木器出土状况



Ph.24 SE12下底遺物出土狀況



60



62



64



63



66

Ph.25 SE12出土遺物

### SE13

調査区の東側で検出された。径75cmの円形プランを呈す。検出面からの深さは1.9mを測り、灰白色の八女粘土に達している。底径65cmを測り、底面には67~70の遺物が出土した。

#### 出土遺物

67は下底から出土したほぼ完形の壺である。頸部と胴部の境に浅い沈線を施し、口縁端部は凹状の面を為す。外面は丁寧なヨコナデによって仕上げられているが、胴部は板ナデも用いている。内面も丁寧なナデが施され、わずかに板の小口の痕跡を残す。黄褐色を呈し胎土も極めて精良。68の頸部の立ち上がりは外傾し、口縁端部が肥厚する。外面に継位のハケを施し、内面は胴部に粗いハケメを施し、頸部から口縁部にかけてはナデ上げている。69は2/3程の遺存で68同様に2箇所に穿孔があるものと思われる。外面の頸部から上位のハケメはヨコナデの仕上げによってほとんど消されている。内面も胴部最大径部に成形時のハケメを残すがナデによって仕上げられている。淡赤褐色を呈す。70も下底から出土したが細片である。以上の遺物は弥生中期末までにおさまるものと考えられる。

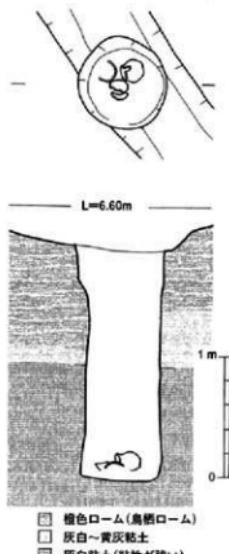
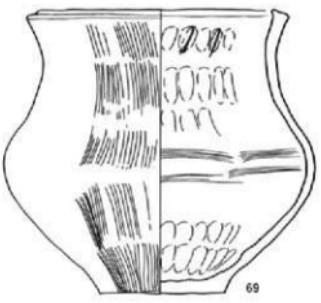
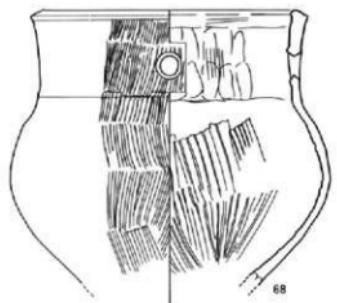
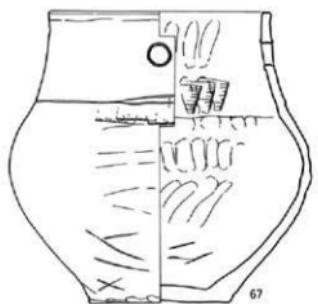


Fig. 32 SE13実測図 (1/40)



Ph. 26 SE13下底遺物出土状況



0 15cm

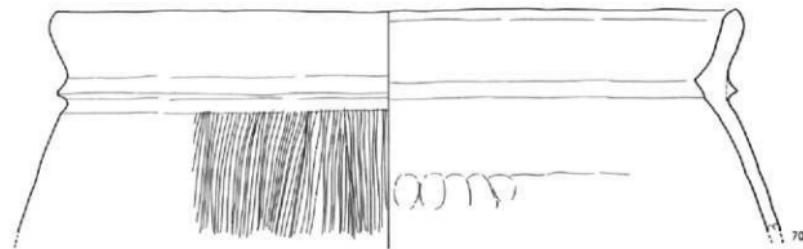


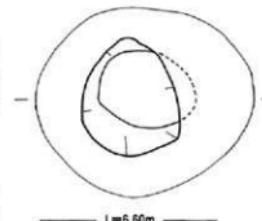
Fig. 33 SE13出土遺物実測図 (1/3)

SE14

調査区の東側で検出された。上面は65~80cmの梢円形プランを呈す。検出面からの深さは3.1mを測り、標高5.2mの八女粘土に達した位置で崩落しオーバーハンギングしている。底面は80~100cmの梢円形プランを呈す。

出土遺物

71は下層から出土し2/3程遺存する。内外面に細かいハケメが残るが、ほとんどナデ消されている。72は上部から出土した壺片である。口縁部上面に5本の櫛歯による列点文が刻まれている。73の磨製石斧の刃部には刷痕が多く残る。石材は未確定。74は立岩産の石包丁である。



Ph.27 SE14出土石器

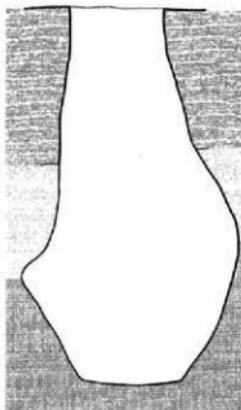


Fig.34 SE14実測図 (1/40)

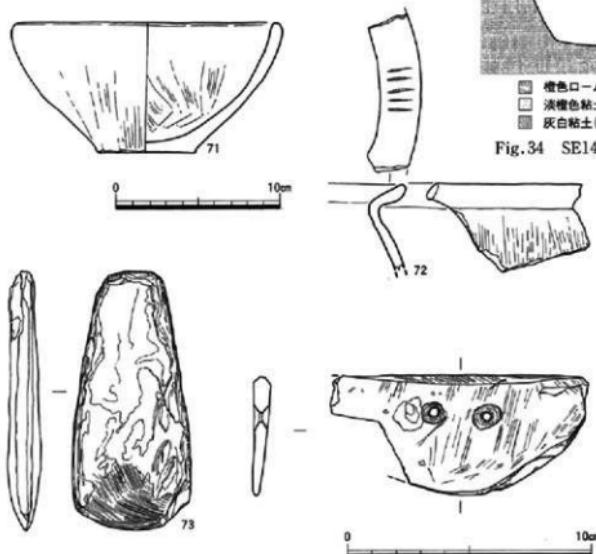


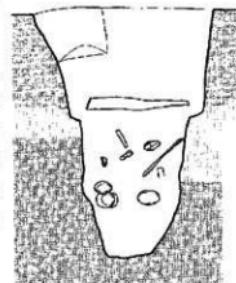
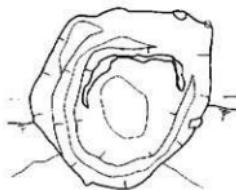
Fig.35 SE14出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

## SE15

調査区東側で検出された。上部が搅乱によって破壊されている。検出面から約80cm掘り下げた位置で1辺が約1mの略方形の井戸枠を検出した、木質がわずかに遺存する程度で、そこから稍円形の井筒とみられる落ち込みを検出した。検出面から底面までの深さは約2mを測る。遺物は井筒を設置したとみられる下位の落ち込み内から多く出土した。

### 出土遺物

75の須恵器壺蓋は井筒内の下底近くから出土。口縁部をわずかに欠く。76の須恵器壺蓋は中位から出土した完形品である。77は土師器に近く焼成が強く全体的に厚い。78は井筒の中位から出土し、完形に近い。80~84は高台が付いた壺身である。81は下底近くから出土した完形品である。85は壺底部とみられ、外底部に墨書きを有す。87の手捏ね土器は中位から出土した完形品である。88は下底近くから出土した土師器壺の底部である。火照を受けススが付着している。89の土師器高杯は上部から出土。脚部は段を有して広がり、対置した部分に穿孔を有す。器厚で指痕を多く残し、粗雑な感を受ける。胎上も砂粒を多く含み粗い。90は井筒内から81の須恵器とともに出土した土師器壺である。ほぼ完形であるが、底部は穿孔された可能性がある。91も井筒内の下底近くから出土した土師器壺の完形品である。92は滑石製の紡錘車。93は堆積岩製の磨製石斧である。94は井筒内の中位から出土した磨石である。側面が磨かれ、一方の側縁は抉れている。上面の一部も研磨され、敲打痕も有す。安山岩製。W 6は木柄と思われる。遺存長61cm、断面径3cmを測る。この他、曲物、剝物片も出土した。



■ 棕色ローム(鳥居ローム)  
□ アズキ色粘土(八女粘土)  
△ 灰白粘土(八女粘土)

Fig.36 SE15実測図 (1/40)

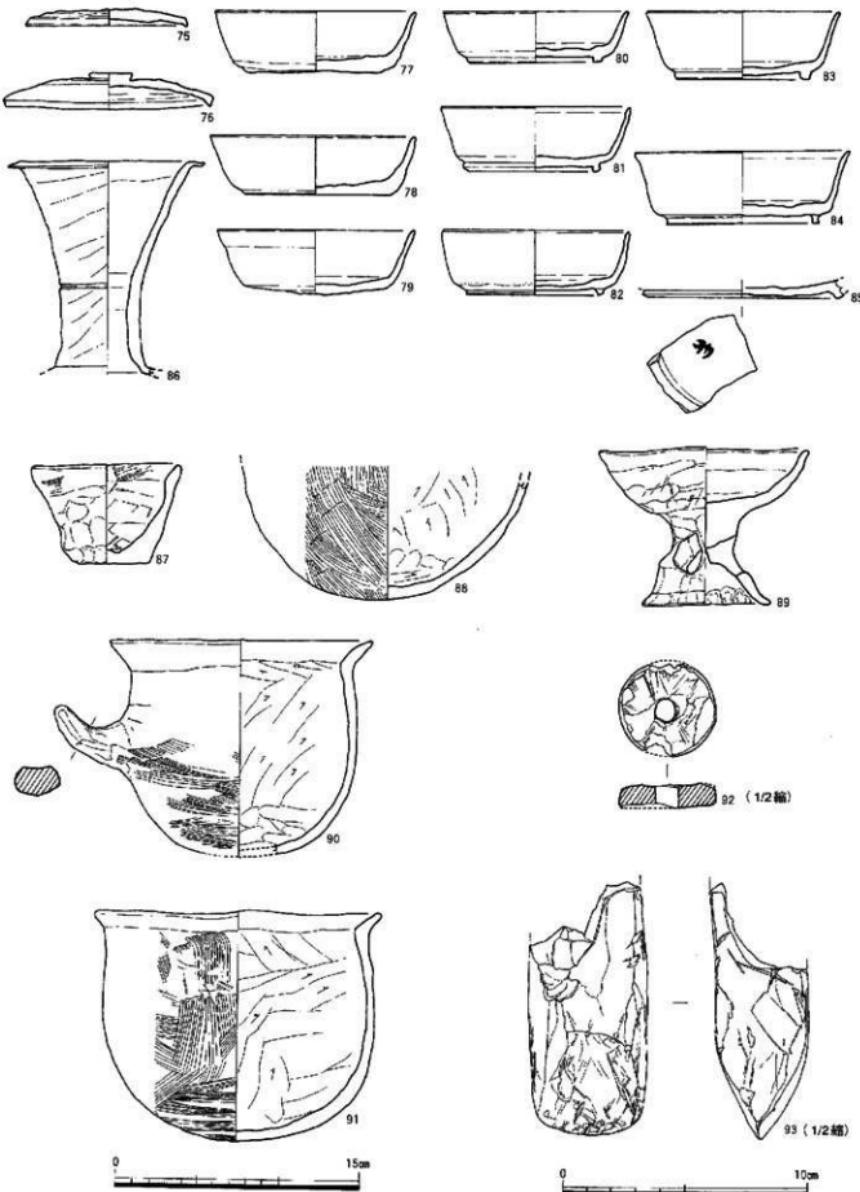


Fig. 37 SE15出土遺物実測図 1 (1/3・1/2)

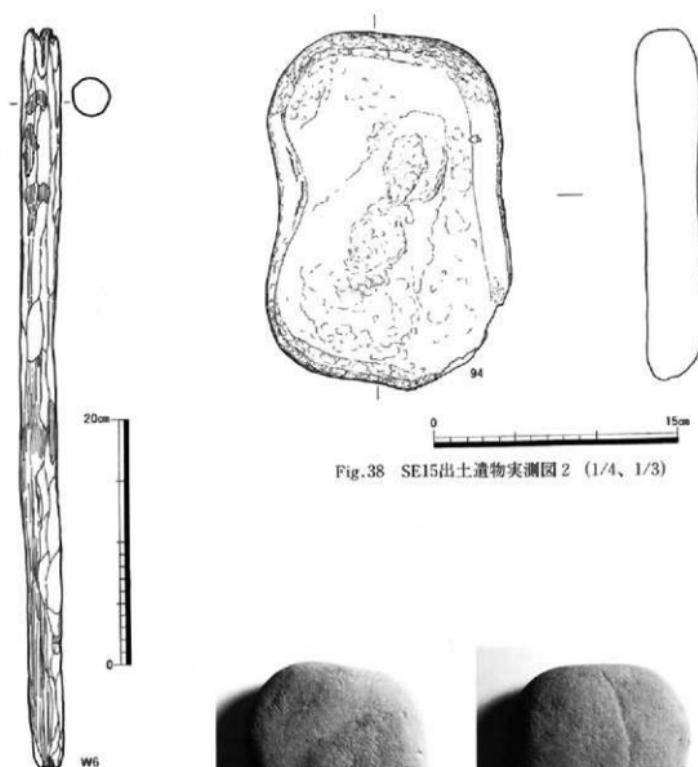
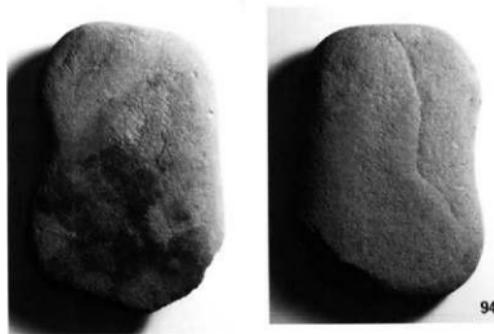


Fig. 38 SE15出土遺物実測図 2 (1/4、1/3)



SE15 出土石器



Ph.28 SE15井側検出状況



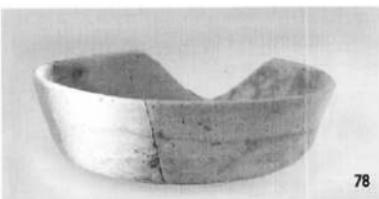
Ph.29 SE15中層遺物出土状況



76



85



78



81



87



89



79



86



93



Ph.30 SE15出土遺物

## SE16

肅斎区東端で検出された。上面は90cmの円形プランを呈す。検出面からの深さ2.1mを測る。下底近くで壁が抉れオーバーハンプしている。下底から30cm上で板状の木片が出土し、その下から壺を主とした完形土器13個体出土した。

### 出土遺物

95~101は下底から出土した完形の壺である。大きさから95、99、101のやや大きいものとそれ以外の小柄のものがある。95~97は頸部が短く、外反し、対置した2箇所に穿孔を有す。口縁端部にかけて肥厚し、端部は円状になった面をなす。外面の調整はナデもしくはミガキとみられる。96は外面と内面口縁部を丹塗りする。内面もナデ調整で、部分的にハケメや板小口の痕跡をとどめる。98~101は95~97に比べ頸部が長く湾曲している。また、外面に縱位のハケメを残すなど違いがみられる。また、98、99は穿孔を有すが、100、101には無い違いがあるが器形は変わらず、98と100、99と101は大きさ、器形など近似する。102~105は丹塗り磨研の袋状口縁壺である。外面の口縁部を横位、頸部を縱位に、胴部上位を横位に下位を縱位に巻く。内面はハケメや板小口の痕跡が部分的にみられるが、ナデで仕上げている。106は下底から出土した丹塗りの高脚脚部である。107、108は丹塗り磨研の壺胴部である。109は下底から出土したほぼ完形の丹塗り磨研壺である。外面体部は器面があれて調整が不明瞭。110も下底から出土した完形の壺である。火熱を受けず調整が明瞭に残る。111も下底から出土した大型壺である。器面が剥落しているが、わずかに丹塗りが残る。以上の遺物の時期は弥生時代中期末の時期におさまると考える。

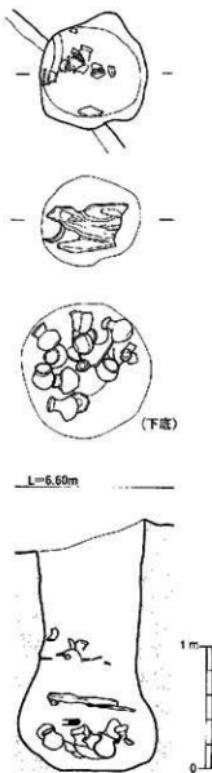


Fig. 39 SE16実測図 (1/40)



Ph.31 SE16中層木器出土狀況



Ph.32 SE16下底遺物出土狀況

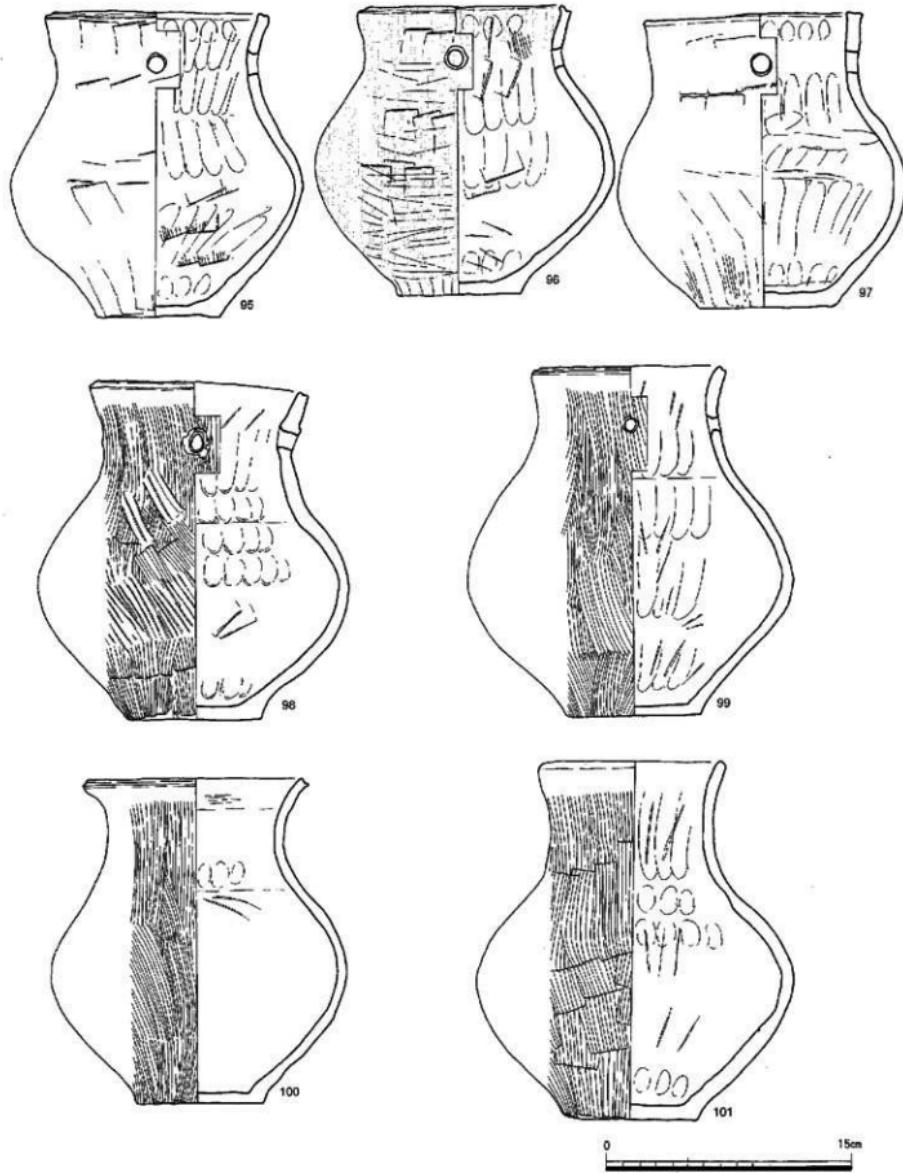
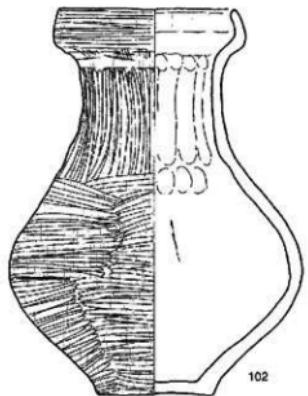
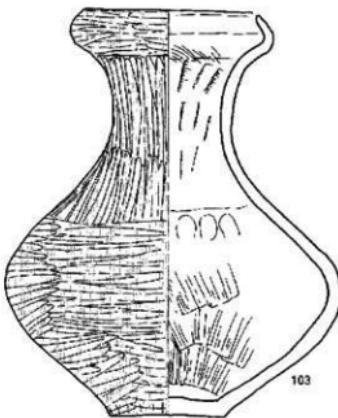


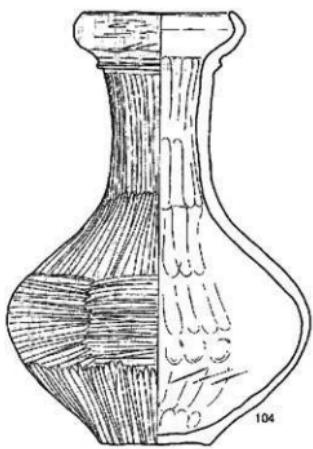
Fig. 40 SE16出土遺物実測図 1 (1/3)



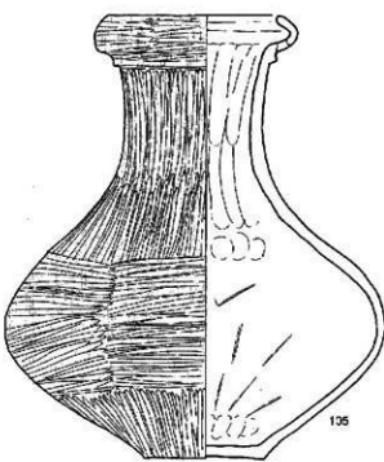
102



103



104



105



Fig.41 SE16出土遺物実測図 2 (1/3)

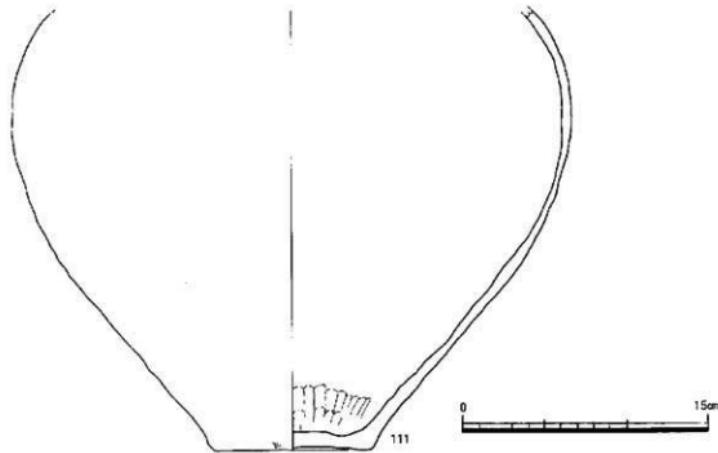
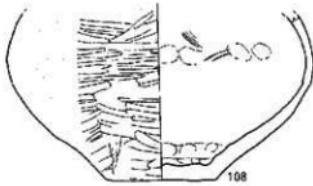
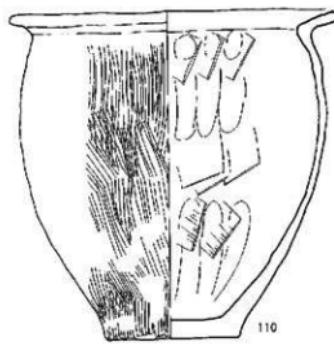
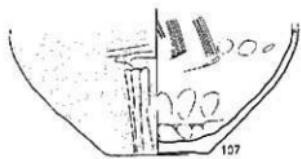
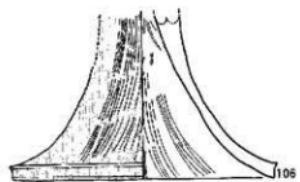


Fig. 42 SE16出土遺物実測図 3 (1/3)

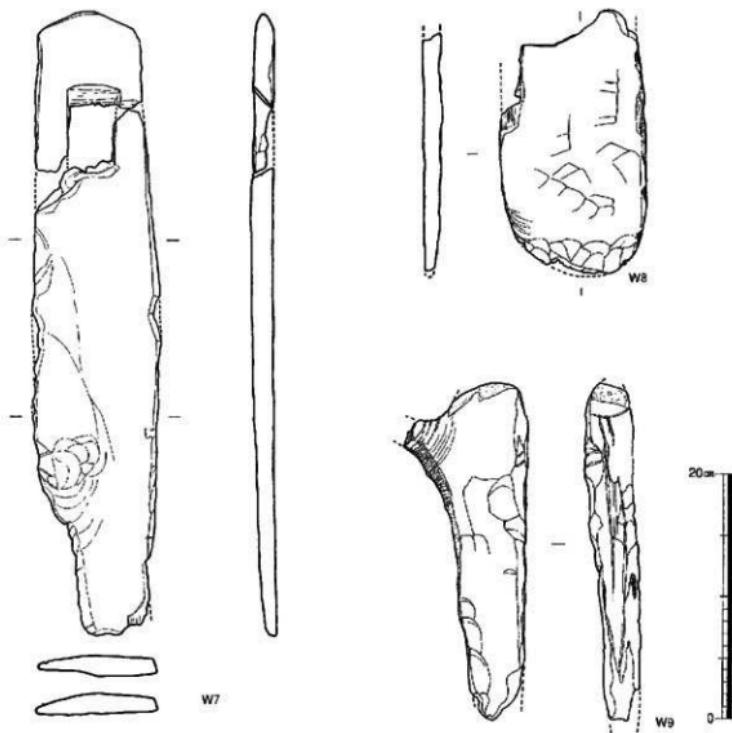


Fig. 43 SE16出土木器 (1/4)

### 木 器

W 7～W 9の銹種は未確定である。W 7は幅10cm、遺存長52cmの身幅が狭い鉄である。木柄着装の孔を $4 \times 5$ cmの大きさで穿っている。W 8は鋸先、W 9は木柄の刃部を着装する部分と思われる。節の堅固な部分を利用したものか。この他、炭化した建築材と思われる丸太材、板材、鉄等が出土した。



95



96



97



98



99



100



101

Ph.33 SE16出土遺物 1



102



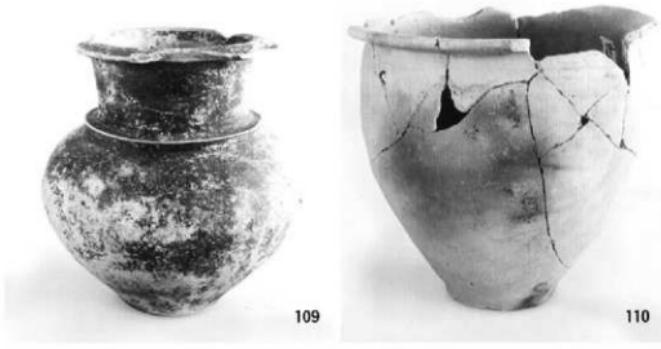
103



104



105



109

110

Ph. 34 SE16出土遺物

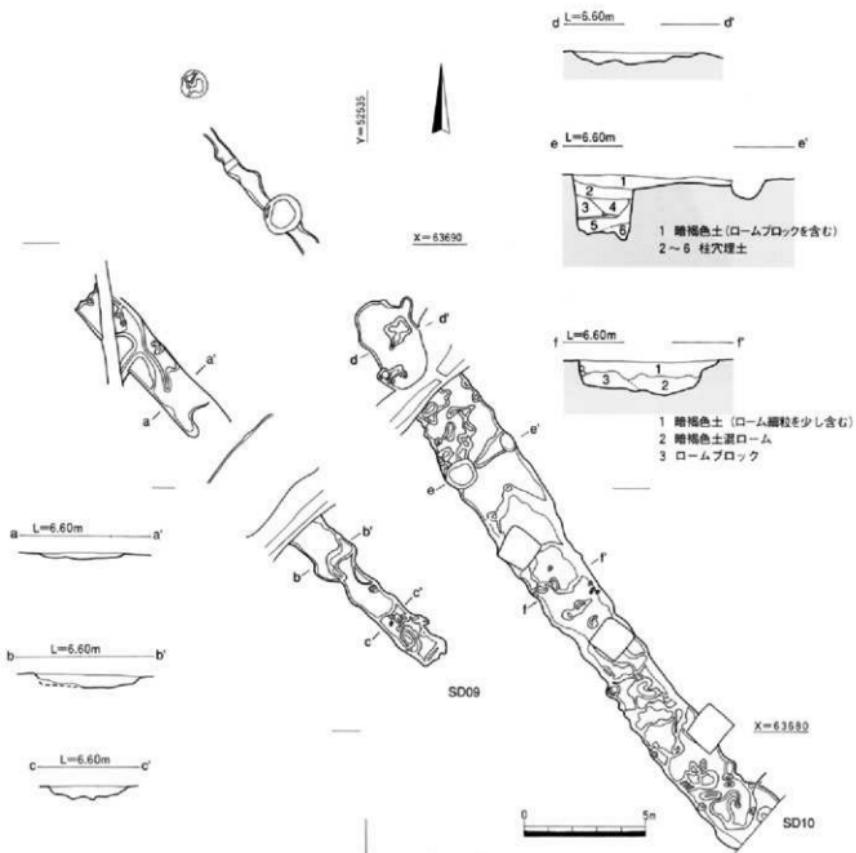


Fig.44 SD09・10実測図 (1/100)



Ph.35 SD09、10全景 (北から)

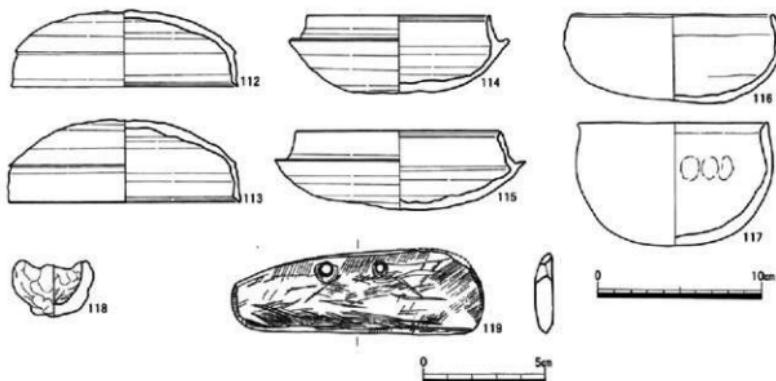


Fig. 45 出土遺物実測図 2 (1/3, 1/2)

#### SD09、10

調査区の東側で検出された。両者は近接し方向が似ているが平行していない。SD09は遺存の良い箇所で幅85cm、深さ10cm、SD10は幅115cm、深さ30cmを測る。両溝とともに下底の凸凹の起伏が著しい。水路の可能性もあり、周辺調査で延長が確認されることを期したい。

#### 出土遺物

112、113の須恵器坏蓋は体部と口縁部の境に段を有し、口縁端部にも段が付く。114は灰白色を呈し軟質である。受部径が13.6cmと他と比べ小さく、口縁端部の段も沈線化している。116、117は土師器坏、118は手捏ね土器。119石包丁の石材は安山岩か。



Ph. 36 SD10遺物出土状況（南から）

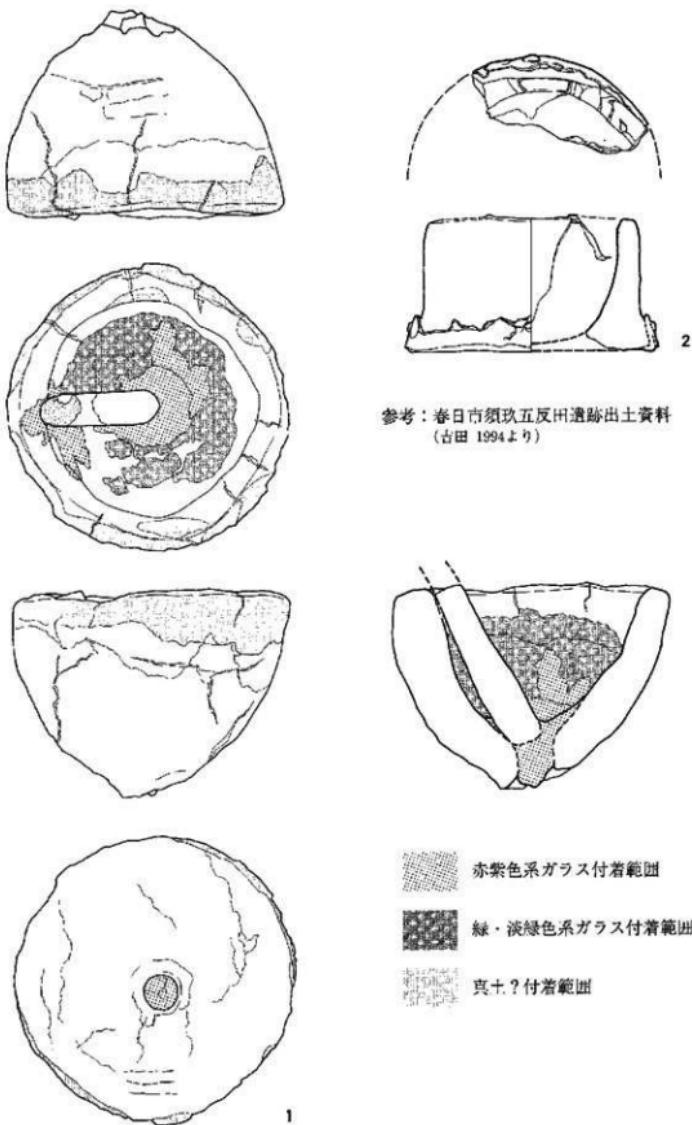


Fig. 46 SE-07出土のガラス加工具

## IV 付論 SE-07出土のガラス加工工具について

福岡市埋蔵文化財センター 比佐 陽一郎

標記の件について保存科学的調査を行ったので、その結果とそこから導き出される資料の用途について若干の考察を記す。

この資料は素焼きで、最大口径58mm、同高さ42mm、深さ28mm、器壁の厚さは口縁部付近で6~9mmを計る。いわば「ぐい飲み」様の小法、形態であるが、底部が尖底気味である点は「可く杯」或いは「そらきゅう」<sup>1)</sup>ともいいくべきものである。外面の色調は底部付近では淡橙色であるが口縁付近は熱を受けたように灰色に変色する。胎上は1~3mmの大の石英粒を含み比較的粗く、全面に亀裂が入る。適度な歪みは手捏ねによる成形を示すものと思われる。また外面の口縁から下1cm程の範囲には、不規則に本体の胎土とは異なる、やや粒子が粗く灰色を呈した土が薄く付着する部分が認められる。これらは下部に行くに従い厚くなり、剥離したような状態を呈する部分も見られる。内面には底部を中心に淡黄緑色や赤紫色或いは暗紫褐色ともいるべきガラス状物質が薄く堆積しており、何らかのガラス製品加工に使用されたと想定される。何より日を引くのは、容器内に立てかけられたように本体と同質の棒が溶解したガラス状物質で固着している点である。この棒は下部がやや太くなっているが、現況の中央付近では6.5mm程の太さで、断面はほぼ円形を呈する。現存長33mmを計るが、上端は破損しており元來の長さを知る術はない。またド縁も底部に溜まったガラス状物質に埋もれているため、本体とどの様な状態で接しているかが今ひとつ判然としない。また、外面から見ると底部中央には径5mm程の孔があるが、現況では暗紫褐色のガラス状物質が詰まっており、内面からは底部に溜まったガラス状物質や土製の棒により孔の状態は確認することができない。

まず、孔の状況などを確認するために透過X線による観察を行った。使用した透過X線撮影装置はI.I (イメージ・インテンシファイア)と呼ばれる機器によって、撮影された画像がリアルタイムでモニター観察できる。また管球とI.Iを結ぶアームが資料を挟んだ位置で回転するため、角度を変えながら観察することにより、資料の構造を立体的に捉えることが可能である。

観察の結果、外面から見える孔は内向まで貫通していることが分かる(巻末写真参照)。土製の棒の先端は残留物が堆積した影により不鮮明なもの、孔の縁辺で止まっているものと思われる。また孔の内部や底部付近のガラス状物質は、胎上に比してX線の透過度が低く、ガラスであれば鉛ガラスなどより密度の高い種類であることが予測された。

次に内部の残留物の同定を目的として、蛍光X線による分析を行った。この方法は試料にX線を照射し、含有する各元素から発生する二次X線(特性X線)を検出器でとらえてX線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。古代のガラスは先学の調査、研究によって幾つかの種類に分類され、その流通や変遷の過程が明らかにされている。今回は大まかな種類を知ることを目的としているため完全非破壊による定性分析により実施した。分析の条件は次の通りである。

分析装置：エネルギー分散型微小領域蛍光X線分析装置(エダックス社製/Eagle μ probe)／対陰極：モリブデン(Mo)／検出器：半導体検出器／印加電圧：20kV／電流：520~540μA／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3mm<sup>2</sup>／測定時間300秒

装置の構造上、容器内面底部の分析は不可能なため、外面底部に突出した部分と口縁に付着残したもののが分析対象とした。その結果、2カ所とも同様の結果が得られている。珪素(Si)、鉛(Pb)が特徴的な元素として検出された他、カルシウム(Ca)、バリウム(Ba)、鉄(Fe)、銅(Cu)などが認められた。これらは鉛バリウムガラス(PbO-BaO-SiO<sub>2</sub>系)の組成と類似するものであり、これらのことから本

資料は鉛バリウムガラスを加工するために用いられた製品と考えられる(巻末図参照)。

鉛バリウムガラスは中国の戰国時代や漢代に用いられた種類のガラスで、日本ではガラス流通の初期段階である弥生時代前期末～中期初頭から存在し、弥生時代のみに流通したとされる(肥塚2003)。製品の器種としては管玉や勾玉が一般的であるが、変わったところでは蓋にも用いられている。色調は青や緑、その中間など寒色系を中心とする。本資料に残るガラス部分は、同じ材質の製品と色調が異なっているが、成分的には銅が検出されるなど青色系統の製品の分析結果とそれほど大きな差異は無く、元々現在のような色調ではなく、通常の色調として作られていたものが何らかの原因で変色したものと思われる。その原因は今回の調査で明らかにしえていないが、同化する漆の変質や不純物の混入などが考えられよう。いずれにせよ分析からも本資料が弥生時代の所産であることが裏付けられたと言える。

以上の手掛かりを元に、この資料の使用法、及びこれを用いて作られた製品について若干考えてみたい。弥生時代のガラス製作関連資料としては春日市須玖五反田遺跡において、様々な痕跡が発見されており、吉田佳広氏によって詳細な検討が加えられている。ここでは弥生終末期の上器を持つ住居跡などからガラス勾玉の鋳型、木製品、砾石の他、培塿とされる破片が9点出土。「培塿」はいずれも破片のため全体の形状は不明であるが、復元によって示された大きさや破片口縁部の形状、厚さなど比惠87次出土例と類似する要素が多く認められる。特にFig.6-2に示した破片は、外側面底部付近に底に何か別のものを接合したかのような真土が塗りつけられている。いずれも小型であることなどから、この中でガラスを溶解してもすぐに凝固してしまうとの指摘があるとして、鋳型に取り付ける湯口やガラス材の色調整用培塿などの見解が示されている(吉田1994)。これに対して藤田等氏は、形態が加熱に不向きであること、異物が混入しやすうこと、器壁の厚さが高温に耐えられるとは考えにくいことなどから、これらの資料と取瓶をしている(藤田1994)。因みにこれらは材質分析によって、やはり鉛バリウムガラスとの結果が示されており、この点でも比惠出土例と共通している。

比恵87次出土例を見てみると、形状や寸法は須玖五反田遺跡例に類するとして、新たに加わった(発見された)要素としては底部の孔、そして上製の棒が挙げられる。

まず底部の孔であるが、これは溶解したガラスを流し出す用途を考えるのが最も自然であろう。そして側面に残る灰色の上の存在は、この容器が別の器物に接合されていた痕跡と見なされ、とすれば小容量に起因する凝固の指摘とも併せ、鋳型とセットとなる湯口的な用途が想定される<sup>2)</sup>。この土は口縁付近のみに残留し、また上方よりも下方がやや厚くなっている。更に木体胎土が口縁付近のみ灰色に被熱したようになっていることを考え合わせると、資料の下方に厚く上部は薄く粘土を撫で付けるように鋳型に固定し<sup>3)</sup>、しかも鋳型と本資料が組み合わされた状態で加熱されたことで、下方の粘土は表面だけが熱を受け、(本体外表に近い) 内部は変質(焼成)せずに脱落し土に還り、本体外表も下方は変色しなかったと考えられるのではないだろうか。そうなると単なる湯口として(流し込むガラスが冷えないように) 鋳型と共に熱せられた可能性と同時に、本資料内にガラス素材を入れたまま加熱し、ガラスの溶解と共に鋳型内にガラスが流れ込むような作業工程<sup>4)</sup>も想定できるであろう。

そこで固着した土製棒の用途が問題となる。これについては、単なる搅拌の他、溶解したガラスを孔から押し出すといったものが、まず思いつくところである。が、仮に湯口と同時に培塿の機能を有していたとすれば、溶解して孔から流れるガラスの量を調節する栓という可能性も生じてこよう。

しかしこれら使用法に関する仮説も、この道具を用いて作られた製品を考えると大きな自己矛盾に陥るのである。弥生時代の鉛バリウムガラス製品は奴国城、伊都国城を中心に数多く発見され、全て

について分析が行われているわけではなく正確な計上はできないが、点数としては管玉が最も多いと考えられる（藤田1992）。しかし管玉の多くは巻き付けによる成形が想定され、鋳型使用の可能性は低い。鋳型としては前出の須玖五反田をはじめ、井尻B遺跡（文化庁2002）、弥永原遺跡（福岡県1965）などで勾玉のものが出土し、この内、須玖五反田の勾玉鋳型に付着するガラスは分析により鉛バリウムガラスとされていることから、一見、この「湯口あるいは増堀」状製品が勾玉成形と関係するようにも見える。ところが前出の古田氏による考察では、勾玉鋳型は、その形状、構造からオープン型とされ、その説明は理にかなったものであるため、先に記したような湯口状の構造では勾玉鋳型との結びつきを想定するのは困難となるのである。古田氏もこの点については言及されていない。ただ、この問題の扱い下げは、情報不足の現状では空想の領域に深く入り込むものであり、今後の課題としておきたい。

現在、福岡平野では弥生時代のガラス製品製作に関わる資料は春日市須玖遺跡群及び隣接する南区井尻、弥永原など、奴国領域でも南部に集中している。同時にこの地域は後期を中心として青銅器の大生産地帯でもあり、鉄器製作の痕跡も少なくない。広い目で見れば、「強い火力を利用した“ものづくり”」がある範囲内でまとまって行われていたことを示しているといえる。

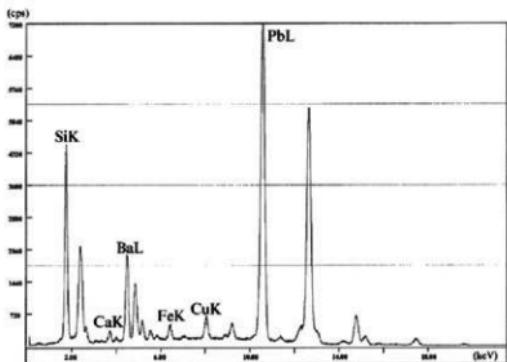
一方、奴国領域の北半でも比恵遺跡40次や那珂遺跡8次などで青銅器鋳造関連資料のまとまった出土が見られることから、南北ほどではないにせよ青銅器生産が行われていることが窺える。今回の発見は、これにガラス生産が加わることを示唆しており、やはり南北と同様の状況があったことを示す端緒として捉えることができるのではないだろうか。また当時のガラス製品の製作方法を具体的に知ることができる資料として技術史的側面からも貴重なものであることは間違いないであろう。

## 註

- 1) 「可く杯（べくはい、またはべくさかずき）」や「そらきゅう」は高知県や鹿児島県で用いられる尖底の杯で、注がれた酒（焼酎）を飲み干すまで下に置くことができないというものである。
- 2) 金属の鋳造では鋳型に流し込む際の受け部を「掛け堰」（遠藤2003）と称する。
- 3) 繩かい構造は不明であるがその姿（断面図）は正に須玖五反田例（Fig.6-2）のようなものであろう。
- 4) この技法はパート・ド・ベル（Part de Verre）と呼ばれ、中口裕氏により「練りガラス」技法と称されている（中口1966）ものに類似すると思われるが、この方法の場合、手の湯口からガラス屑を充満する際に鋳型内にも原料がある程度入っているものと解釈できる。それに対して出土品は完全な容器の形態で孔も小さく、中口氏の言う「湯口」とはイメージが異なる。

## 参考文献

- 遠藤喜代志2003「現代の造型法から見た石型製作法について」『鏡面研究』奈良県立橿原考古学研究所・二上古代鋳金研究会  
肥冢隆保2003「日本出土ガラスの考古学的研究—古代ガラス材質とその歴史的変遷—」『考古科学の総合的研究研究成果報告書』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所蔵文化財センター  
中口裕1966「練りガラス法による古代ガラス工の製作技術について」『九州考古学』29・30 九州考古学会  
福岡県教育委員会（編）1965「福岡県弥永原遺跡調査概報」福岡県文化財調査報告書第32集  
藤田等1994「弥生時代ガラスの研究」名著出版  
文化庁（編）2002「発掘された日本列島2002新発見考古遺報」  
古田佳広（編）1994「須玖五反田遺跡」春日市文化財調査報告書第22集 春日市教育委員会



蛍光X線の分析結果



透過X線像  
(上段: X線弱・下段: 強)

## V おわりに

本調査地点は既述の通り、削平深度が大きく造構の大半が消滅していた。ここでは「II 位置と環境」(p-2)において記したことと若干の補足しておく。本調査地点の西側には台地頂部に占める弥生終末期の道路状遺構がのが、これより西側が急傾斜であるのに対し、東側は緩やかな傾斜で集落の中心部が広がる。従って、この道路状遺構は集落全体からみれば西側縁辺よりに配置されたと推測される。さらに東側を限るよう台地を分断する弥生中期末に埋没した環濠が第21次、15次、53次で検出されている。この環濠の延長は南側の台地が落ちた第46次で検出された溝に接続するとした説もあるが、現段階では不明である。何れにしろ、本調査地点は集落の南よりの中心部に占め、最も多く出土した弥生中期末遺物と検出された井戸はこれを如実に示している。

検出された井戸は時期が全く異なるにも拘わらず集中する箇所が2地点みられる。このことは経験的に知られる水脈が合致したものか、井戸としての空間が受け継がれたものであろうか。また、井戸の形態も八女粘土の深い位置まで達するものから小型の浅い、雨水を貯めたようなものまである。この小型井戸の中でSE07は特に浅く、出土遺物が極めて少ない中、ガラス壙塙の完形が出土した。このことからガラス壙塙は意識的に埋設されたものと考えられ、その思想が注目されるとともに集落中枢部において高度技術の生産機構が掌握され存在したことを窺わせる。

最後に奈良時代から平安初頭に機能を終えたとみられるSE02とSE15について若干ふれておく。とともに墨書き器が出土し、特にSE02出土の「本」の異体字は多数の土鍋の下の中央に意図的に埋設されていた。これと同じ墨書きは東比恵遺跡（福岡市埋蔵文化財調査報告書400集）の旧河川から多く出土し、祭祀的色彩が強いことを窺わせる。同時期の造構として南側の63次で道路造構とした溝と路面が検出されている。しかし、その延長は本調査区では削平されて検出されず、方向や時期がことなるSD09、10が近くから検出されたにとどまる。

報告書抄録

ふりがな	ひえ						
書名	比恵 40						
副書名	比恵遺跡群第87次調査報告						
巻次	40						
所在地	〒810-6621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667						
発行年月日	2005年(平成17年)3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
比恵遺跡群 第 87 次	福岡古博多区博多 駅南 6 丁目 9 4	130 0127	33° 34' 34°	130° 25' 53°	2003.04 ~ 2004.01.20	1402	分譲住宅 建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
集落	弥生時代 古墳時代 奈良時代	井戸14基 溝2条	弥生土器 土師器 須恵器 木器	井戸からガラス壙塊が出土			

## 比恵 40

—比恵遺跡群第87次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第857集

2005年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 久野印刷株式会社

福岡市南区市崎1-15-7

TEL 092-523-7050

